

令和2年度

のじぎく文芸賞

2020 Literary Works

発刊にあたって

兵庫県と（公財）兵庫県人権啓発協会では、県民の皆さん一人一人が主体的に人権について考え、また文芸作品の創作や鑑賞をとおして豊かな人権感覚を身につけていただくことを目的に「のじぎく文芸賞」公募事業を続けて参りました。二十七回目を迎える本年度は、一、六一四編の作品が寄せられました。いずれも、人の優しさや思いやり、支え合うことのすばらしさ、生命や人権の尊さ・大切さなどが綴られた力作ぞろいで、平成六年の第一回公募以来、応募総数は二二二、三四七編となりました。

この二十七年の間に、少子・高齢化や情報化の飛躍的な進展、人々の価値観や生き方の多様化に伴い、人権課題もますます多岐にわたり、複雑化してまいりました。子どもや高齢者への虐待、学校や職場でのいじめ、セクハラやパワハラ、インターネットを悪用した差別事案など、人権侵害はまだまだ後を絶ちませんが、今年は新型コロナウイルス感染症の流行という状況下で、感染者や医療従事者、その家族への差別や偏見といった課題が発生し、私たちの人権意識が問われる年ともなりました。

兵庫県では、私たち一人一人が互いの人権の尊重を感性として育み、日常生活の中で自然に態度や行動として表すことが文化として定着した社会をめざして、「人権文化をすすめる県民運動」を市町とともに展開しており、「のじぎく文芸賞」も、その取り組みの一つです。ご応募いただいた作品の中で優秀なものについては、ひょうご人権ジャーナル「きずな」やラジオ番組での人権啓発に活用してまいります。作品づくりをとおして育まれた人権尊重の心が県民の皆さんに広く発信され、人権文化の定着がいっそう図られることを期待しています。

本作品集には、本年度の応募作品の中から、最優秀賞四編、優秀賞七編を収録いたしました。県民の皆さまにお読みいただくとともに、人権啓発や研修の場でぜひご活用いただき、日常生活での実践につなげていただくことを願っています。

また、多数の作品について、慎重かつ厳正な審査をしていただきました審査委員の皆さまに心よりお礼申し上げます。

最後になりましたが、今後とも「のじぎく文芸賞」をはじめさまざまな啓発事業などを実施し、県民のみならずの人権意識の高揚や人権文化の創造に努めてまいりたいと存じますので、どうぞよろしく願います。

令和二年十二月

兵 庫 県

公益財団法人兵庫県人権啓発協会

令和二年度 人権問題文芸作品「のじぎく文芸賞」受賞者

氏名 作品名 部門(部)

〈最優秀賞〉

稲見 臣 二

蒼空そうくうのあなたへ

小説(一般)

東条 幸 一

この思いが届きますように

随想(一般)

吉村 隆

あ、い、う、お

詩(一般)

山崎 祐 二

ある晴れた日の風景

創作童話(一般)

〈優秀賞〉

先間 美保子

いつかあなたが見る景色

小説(一般)

加藤 奈乃葵

過ち、償い

小説(学齡児童生徒)

陣内 和美

誰もが大切にし合える社会へ

随想(一般)

松田 和佳

群れるということ

随想(学齡児童生徒)

大恵 やすよ

傘

詩(一般)

北尾 天珠

ぼくは、ここにいろよ

詩(学齡児童生徒)

藤本 忍

花咲かばあちゃん

創作童話(一般)

※創作童話部門 学齡児童生徒の部 該当作品なし

〈佳作〉

霜坂映月
阿部忠彦
佐々倉秋吾
高田満
三木はる
太期郁子
吉田奈菜葉
月島あすか
井筒日陽
いなみしんじ
小田涼子
青木萌結
北尾珠羽
小寺優菜
山下治美
阿部忠彦
遠藤里絵

群青

明日へ

「おはよう」が消えたセカイで

つきあうということ

〃当たり前〃のその先に

あなたがいたからこそ

SNSのありかた

あの日の電話から

今を生きる

いのち

脱規格

ねえ。

ちよつとの「ありがとう」

……また明日

ウサギとクマ

お友だちに

森の音楽

小説（一般）

小説（一般）

小説（一般）

小説（一般）

随想（学齡児童生徒）

随想（一般）

随想（学齡児童生徒）

随想（一般）

随想（学齡児童生徒）

詩（一般）

詩（一般）

詩（学齡児童生徒）

詩（学齡児童生徒）

詩（学齡児童生徒）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

創作童話（一般）

目次

【総評】	審査委員長	林	芳樹	1
【部門別審査講評】	各審査委員	2
【最優秀賞・優秀賞作品】
《最優秀賞》
〈小説部門〉	蒼空 <small>そうくう</small> のかなたへ	稲見臣二	19
〈随想部門〉	この思いが届きますように	東条幸一	34
〈詩 部門〉	あ、い、う、お	吉村隆	39
〈創作童話部門〉	ある晴れた日の風景	山崎祐二	41

《優秀賞》

〈小説部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

いつかあなたが見る景色 …… 先間 美保子 ……
過ち、償い …… 加藤 奈乃葵 …… 58 45

〈随想部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

誰もが大切にし合える社会へ …… 陣内 和美 ……
群れるということ …… 松田 和佳 …… 75 71

〈詩 部門〉

(一般の部)

(学齡児童生徒の部)

傘 …… 大 恵 やすよ ……
ぼくは、ここにいろよ …… 北尾 天珠 …… 80 78

〈創作童話部門〉

(一般の部)

花咲かばあちゃん …… 藤 本 忍 …… 81

◆令和二年度応募作品の内訳

合計	学齡児童生徒 (中学生以下)	一般 (高校生以上)	部
			部門
31	10	21	小説
1,155	1,012	143	随想
407	148	259	詩
21	4	17	創作童話
1,614	1,174	440	応募総数

◆令和二年度審査委員

林 芳樹(総括)
時里 二郎(詩)

野元 正(小説)
尾崎 美紀(創作童話)

三浦 暁子(随想)

総評

審査委員長 林 芳樹

2020年って、どんな年？ 何年後、あるいは何十年後かにそう尋ねられたら、多くの人は「新型コロナウイルスと向き合った年」と答えるでしょう。未知のウイルスへの恐れや不安に満ち満ちた1年でした。

この感染症をどう受け止めたらいいか。さまざま意見、見方があります。その中でもとても印象的だったのは、ノンフィクション作家石井光太さんが取材に対して語った言葉です。東日本大震災の被災地を見つめた作品「遺体―震災、津波の果てに」が話題になった気鋭の作家です。

コロナ禍にほんろうされる人々と会って話をしながら思ったそうです。「新型コロナウイルスは人を試す病気だ」と。自分はどうか対応したらいいのか、誰もが課題への答えを出すことを求められたからです。人を試す。なるほど、と思いました。

感染した人を見守るまなざしに揺らぎはないか。懸命に治療する医療従事者への感謝を忘れていないか。暮らし向きの厳しいみなさんをおもんぱかる優しさは失われていないか。私たちみんなの姿勢が試されていると思えるのです。

石井さんは、こうも話していました。コロナ禍で「人々がつながり合う必要性が再認識される」と。しんどい時は支え合う、救い合う。それが問われるという意味です。

のじぎく文芸賞への応募は過去3番目の多さでした。この感染症への関心が原稿用紙へ向かわせたのかもしれない。テーマとして取り上げなくても、作品の底を流れているようにも感じました。そして最優秀賞、優秀賞に選ばれた作品に息づくものを挙げれば、「つながり合う」ではないかと見受けました。それぞれの作品をどう受け止めたか。審査委員みなさんの評をじっくりお読みください。

まだ続くコロナ禍で、見失ってはいけないこと。冊子に耳を近づければ、いろんなささやきが聞こえてきそうです。

部門別審査講評

【小説部門】

審査委員 野元 正

《審査総評》（一般の部と学齡児童生徒の部を含めて）

今年度の小説部門の応募総数は、31編でした。その内訳は一般の部21編、学齡児童生徒の部10編でした。令和元年度応募総数24編（一般20編、学齡児童生徒4編）ですから、応募総数はコロナ禍にもかかわらず増加しています。このようなときこそ文学が力を発揮するときだと思えます。

毎年書いていますが、小説は常識や既成概念を超えてテーマに添った独自の考え方や新しい取り組みなどを通じて生きる力や共感を呼び起こすものです。

各作品の審査は例年通り、「いじめ」「謂われのない差別」「障害」「見て見ぬふり」など、具体的な現代社会の諸問題を「人の優しさ」「思いやり」「連帯」「励まし」「生命や人権の尊さ、大切さ」などを通じて将来に一点の光明を感じる、また読後感の爽快な作品を選んだつもりです。

〈最優秀賞候補〉（一般の部と学齡児童生徒の部を併せた全作品より）

作品名「蒼空のかなたへ」 稲見 臣二

朱里（あかり）は小学校教師だ。美味な天津飯を出す評判の中華料理屋で車椅子の男の子が空いている時間帯へと断られるのを目撃する。九月の始業式の時、朱里は驚く。自分のクラスの転入生はあの車椅子の男の子樹（たつる）だった。樹は知的理解や発語には問題はないが、緘黙の傾向にあった。彼には特別支援介助員「よかドン」が付いた。彼の仕事は樹のトイレの介助。2学期の最大の行事はスポーツフェスティバルだ。それは、教師は口を出さず児童の自主性に任されていた。

フェスティバルの課題は樹の意向を入れて彼が参加することだった。よかドンの宿題は「障がい」とは何かと、樹も含めた全員参加の方法はいかにすべきかだ。そのためには樹の意向が重要だ。児童会長ユータはよかドンの助言で樹のトイレにつきあい、樹からフェスティバルでは自分の足で歩きたいという希望を聞き出す。本番では樹の頑張りもあつて6年A組は学級別で優勝。樹はフェスティバル100周年記念風船上げにも参加し、マイクで「ありがとう」と言った。「障がい」や単なる思いやりややさしさでない「合理的配慮」など現代社会に調和した福祉や介護などの考え方を知ることのできる秀逸な作品だと思う。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「いつかあなたが見る景色」 先間美保子

私（麻美）は、クラスの女の子たちがクラス一番の人気者河合さんをいじめる現場に遭遇する。私はその目撃情報を田上先生に伝える。河合さんは学校ではいじめられたそぶりを見せず、田上先生にもそんな事実を否定するがやがて河合さんが不登校になる。私はその原因のいじめの事実を教室で訴えたが、アイツらは事実と違う写真を元に、河合さんと田上先生と私の間の恋愛問題にすり替える。教室のクラスメートは一人を除いて見て見ぬ振りだった。それを機に私も引きこもりとなる。母は常にやさしかったが、それはいかに母を苦しめたことか。また田上先生が学校を辞めたことも知る。時が経ち、麻美は20歳になる。私の心はやや回復、コンビニで働けるようになる。クラスメートだった中野さんと再開。見て見ぬ振りの謝罪を受け恋人になる。そんなとき、河合さんから手紙で、真相を知り、二人は会う。私は、いじめに遭ってもいつか暗闇を抜け出し、心地よい景色を見ることができるよう生きてくださいと終わる。いじめが主題だが、読後感の爽やかな、未来に希望の持てる秀逸な作品だと思う。

〈優秀賞〉（学齡兒童生徒の部）

作品名「過ち、償い」 加藤奈乃葵

小学6年生、俺は転校した。そこで初めに声をかけてくれたのが、翔也だ。二人は親友になる。10月頃から、井坂と下崎によるいじめが始まる。俺を教室から閉め出したり、鉛筆をおられたり、つねられたりなど次第にエスカレートしていったが、俺は恥ずかしさも手伝って誰にも話さなかった。翔也が気づいてくれたが、放つといてくれと耐えた。やがていじめはなくなる。翔也とは疎遠になったが、俺の彼に対する贖罪の意識は消えなかった。中学になると、今度は翔也が井坂、下崎にいじめられているのを知るが、俺は謝ることさえできなかった。そのうちに翔也は転校してしまった。小学校の時、俺へのいじめがなくなったのは翔也が肩代わりしたことを知る。高校を卒業した年、俺はようやく翔也と再会を果たす。翔也は再会を喜んでくれて変わっていない。いじめた側のお咎めなしはやや気になるが俺の苦悩もよく書かれている。また真の親友とは何か、いじめの本質に迫る好短編だ。

〈佳作〉

作品名「群青」 霜坂 映月

転校生の私（花芽）に初めて声をかけてくれたのは桃花だ。アイドルの『ロベリア』が好きという共通の趣味もあって仲良しになる。しかし、クラスメートはなぜか桃花を軽蔑の目で見ている。また心に何かを秘めて我慢するような桃花の作り笑いが気になる。クラスのマドンナの三島とクラス日誌をつけているとき、私は三島から桃花と仲良くするな、と忠告される。それは私もいじめられるという警告だった。私は三島の敵とか嫌いとか鋭利な言葉に驚く。家で両親に相談すると、先生に相談しろというが、妹夏芽はいじめられる方が悪いという。先生にいじめを相談したら、クラ

スマートは私のチクリとすぐ気づく。桃花と同じようにいじめられるかもしれない、と悩む。そしてドッチボール大会の中で、桃花を標的としたいじめが行われ、桃花は顔面に強烈なボールを受け、私は桃花を保健室へ連れて行く。目黒先輩や三島などいじめ側も保健室に現れる。私は彼女たちにいじめを止めるよう訴えるがその間、桃花はごめんなさい、としきりに謝り泣くばかり。先生が来て事態を察知、収まる。私と桃花の絆はさらに深まる。表記などに多々修正が必要だが、ストーリー性が高く、その中で主題のいじめ問題と真正面から取り組んだ好掌編だ。

作品名「明日へ」 阿部 忠彦

ほくは高校総体のサッカー県大会でミッドフィールダー同士のヘディングの応酬で脊椎を損傷し、奇跡が起こらない限り一生車いす生活との診断が下る。一時、相手を恨んで面会を断るなど自暴自棄になるが、洪水のため被災した小学校でボランティアとして子どもたちにもちに勉強を教えるうちに、子どもの喜ぶ顔を見て考えが変わる。将来への夢として大学に行つて身体にハンデキャップのある人が自由に動き回れるようなロボット開発に携わりたいと思うようになる。話の流れとしてはよくある話だが、端正な文章で綴る明日への希望を抱かせる好編だと思う。

作品名「おはよう」が消えたセカイで 佐々倉秋吾

12枚弱と短い作品だが、現代社会のなかで消えかけている「あいさつ」という重要な心のふれあいがなくなつたとき、どうなるか。「あいさつ」は差別とか、いじめとか、虐待とかなど、すべての人権に関わる原点ではないのか。この作品は、「おはよう」が消えたセカイ」という設定で、その単なる「あいさつ」に過ぎない慣習がなくなつたときのセカイを想像し、それがなくなりつつある現代社会への熾烈な批判、風刺だと思える。作品全体が暗喩（メタファー）と感じられる好掌編

だと思ふ。

作品名「つきあうということ」 高田 満

定年後の父親の視点で、自閉症で発語のない重度の知的障害者の次女に起床して就寝までをひたすらつきあう情景を描写したたまたまれない迫力のある作品。起床、食事、トイレ、施設への出発、施設でのこと、帰宅、テレビ、風呂etc. など彼女の思いに沿うよう心がける忍耐が読む者に訴えかけるが、明日への明るい展望がない。両親が亡くなられたら、次女はどう生きるのだろうかと悲しくなった。現代社会の闇をあぶり出す作品だと思う。

作品名「当たり前」のその先に」 三木 はる

アカネとチカは幼なじみで仲がいい。それが2学期から二人でいるとクラスメートの人を見下したような変な目を感じる。チカも感じて「怖い」という。やがてチカは学校を休む。その間にアカネには新しい友ミウができ、周囲から不可解な雰囲気は消える。ミウに言わずと、チカは明るいキラクターを演じているという。チカが休んでいる間、先生以外アカネさえ来てくれないチカの寂しさが募る。2週間休んだチカはアカネから手紙をもらって3日目ようやく登校したが、アカネのそばにはミウがいた。アカネは3人が仲良くなるように努力する。まずアカネとチカが仲直りし、ミウとも友達関係ができた。クラスメートの変な目も消えた。みんなそれぞれ個性が違う、その「当たり前」のこと忘れてはいけないと思うアカネ。アカネとチカの視点を変えてそれぞれの個性を書きだした構成が光る佳編だ。

【随想部門】

審査委員 三浦 暁子

《審査総評》

2020年度、随想部門の応募総数は115編、内訳は、一般の部が143編、学齢児童生徒の部は101編でした。力作揃いで、選考する喜びと苦しみを同時に味わいました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症をテーマに選ぶ方が多く、新型コロナウイルス感染拡大による影響の大きさを感じないではいられませんでした。

他にも、SNSの問題点を指摘する作品や、自殺に関して深く考えたものが目立ち、のじぎく文芸賞が世相に深く結びついていることを改めて感じました。

多くの方が、真面目に、そして真っ向から題材に取り組む姿に打たれました。ただ、ひとつ残念なのは、誤字脱字が多いことです。ワープロやスマートフォンの普及により、漢字を書く力が衰えているのかもしれませんが。一方で、作文力は伸びていると感じました。今後の課題として、考えたいと思います。

〈最優秀賞〉

作品名「この思いが届きますように」 東条 幸一

入院に勤務してきた作者にとって、今年の3月15日は、それまでの世界が一変する日となりました。入院中の患者さんの具合が悪く、新型コロナウイルスの感染が疑われたからです。結果は陽性で、騒然とした日々が始まりました。テレビや新聞にも取り上げられ、病院の職員はもろろのこど、家族までがまるで危険人物のような扱いを受けます。そんな悔しく苦しい日々が迫力のある筆致で描かれます。

けれども、職員達が混乱の日々をなんとか乗り切り、立ち直り、いつか理解してもらえると信じて、働き続ける姿に感動を覚えます。絶望と希望が交錯し、現在進行形で進む日々が、見事に描かれた作品だと思えます。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「誰もが大切にし合える社会へ」 陣内 和美

10代から20代まで、死にたい気持ちに苦しんだ作者の告白です。自分が役立たずで邪魔者だという思いからどうしても抜け出すことができませんでした。

そんな作者を救ってくれたのが、祖母でした。

自信を失っている作者にとつて、掃除をしても、お風呂に入っても、背筋を正しても「気持ちのよかね」という言葉を書いてくれる祖母の存在が、大きな励ましとなりました。

一方で、祖父は気むずかしく、つい反抗してしまったといいます。けれども、祖父も、作者を「えらか」と、ほめ続けたのです。

人は人によって傷つけられることも多々、あります。一方で、人は人に救われるということを生活の中で証明してみせた随筆です。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「群れるということ」 松田 和佳

人間とは何か？ について、つきつめて考えた作品です。自分でも気づかぬうちに、人は群れてきていることに、作者は気づきます。だからこそ、友達とグループを作り、自分はその輪からはみ出さないように、注意しながら生きることになります。一人では弱くても、皆で群ればこわくな

い、だから、群れるのだと作者は気づくのです。しかし、そこで立ち止まってはけません。群れるには群れるためのルールが必要だという結論に達します。私たちが生きていく上での大切なヒントとなるでしょう。

〈佳作〉

作品名「あなたがいたからこそ」 太期 郁子

大事な息子さんを22才で喪った母の思い出の記です。

作者は愛する息子を進行性筋ジストロフィーという難病で亡くしています。それは本当に辛く苦しい毎日だったに違いありません。けれども、一生懸命、生きた息子の姿は、母親である作者だけではなく、周囲の友達や知人にも生きる力を与えたのです。

人とのつながりを宝物のようだと表現する作者は、喪失感に負けないで、これからの人生を送っていくに違いありません。

作品名「SNSのありかた」 吉田奈菜葉

便利でありながら、おそろしい一面も併せ持つSNSについて、深く考えた作品です。人を結ぶツールであったはずのSNSですが、今や、人を傷つけ、ひどい場合は死へとおいやることさえあります。おそろしいのは被害者と加害者が表裏一体だということです。いったい、どうやって、この問題に対処すべきなのでしょう。

作者は、刃物にもなりえる言葉を人を包み込む毛布のような暖かさに変えようと提案します。SNSを味方とするためにも必要な考え方だと感じます。

作品名「あの日の電話から」 月島あすか

自殺について、真正面から挑み、考えた作品です。

朝に連絡をとったばかりの友達が、マンションから転落したというのです。警察からの電話で事件を知った作者の悲しさ、驚きを正直に伝えていきます。

自ら命を絶った友達によって、作者は苦しみ、泣き、悩み続けます。何かしてあげることがなかったのだろうかという後悔にさいなまれます。

けれども、苦しみの果てに、「誰かの命が救えるかもしれない」と思うようになったことに、一つの救いを見る思いがします。

作品名「今を生きる」 井筒 日陽

作者の叔父は、「大腿骨頭壊死」という難病になります。まだ26才の若さだったといいます。次第に歩けなくなったため、手術をすることになるのですが、新型コロナウイルス感染症の影響で、なかなか入院できません。

新型コロナウイルス感染症とは、罹った人はもちろんのこと、他の病気の人にも、多大な影響を与えることを、この作品は教えてくれます。叔父に対する優しい思いと、医療崩壊が起きたらどうするかという不安の交錯する様が描かれた作品で、感銘を受けました。

《審査総評》

今年度は、一般259編、学齡児童生徒148編、合計407編の作品の応募があった。

今回はなんとと言っても最優秀賞の「あ、い、う、お」を選ぶことができたことに尽きる。自分の中にある父とはあまりにかけ離れた「別人」のようになってしまった認知症の父。その隔たりに戸惑うほうが、父のしきりにうなる「あ、い、う、おお」という言葉が、ほくへの感謝の言葉であったことに気づき、それまでの父を再び見出していく経緯は感動的だ。詩としてもとてもすぐれた一編に仕上がっている。

人権問題についての詩は、いつも言うように、やはり、実体験にもとづいた作品の言葉には力があり、リアルな実感ゆえの共感を読み手に与える。その意味でははるかに一般の部の作品に読み応えのあるものが多かった。

一方、学童の部では、実体験に基づくような力ある作品が少なかったのは残念である。しかし、学童の作品を通読してみると、人権意識の基本がどの作品にもしっかりとらえられており、教育現場における人権教育の浸透をうかがわせる一面もある。ただ、詩作品として見た場合、あまりにも常識的なスローガンや考え方にしぼられすぎて、内容が上滑りに終わっている作品も少なくない。自分たちの感性がとらえた日常生活や家族との交流、友達とのかかわりなどの体験を、学習してきた人権学習に重ねてじっくりと書く姿勢を望みたい。

〈最優秀賞〉

作品名「あ、い、う、お」 吉村 隆

認知症の父の「あ、い、う、おお」という重いうなり声。死期が迫り来るのがわかっていたのか、普段は無表情な父が、時折あげる不可解なうなり声だ。「父の顔に悲しみが浮かぶ」のは、自分の言っている言葉が息子に通じないからなのだ。「あ、い、う、おお」といううなり声が「ありがとう」なんだとわかった時の「ぼくの心に光が走った」という表現には胸を打たれる。一気に父とぼくとの心の脈が繋がりがあい、父の手を強く握ると、「父の眼の奥が光り」表情が明るくなっていく。命の尊さを感じ、お互いを思いやる父子の優しさにあふれたすばらしい作品だ。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「傘」 大恵やすよ

雨に降られたときに、そつと傘を差し出してもらった経験から、「わたしの周りにはたくさんの人が出て／心に傘をさしてくれる人が大勢いる」と気づく。傘は人の思いやりや優しさの比喩。「支え合うことのすばらしさ」や「一人ひとりを大切に、心豊かな社会」を自分も作っていかうとする心の姿勢があらわされていて、素直な共感をさそう一編である。

〈優秀賞〉（学齢児童生徒の部）

作品名「ぼくは、ここにいますよ」 北尾 天珠

まわりの友達のなかで、自分はほんとうにいるのだろうか。ひよつとして、「とうめい人間」のよう、見えていないのかもしれない。そのような集団のなかで感じる孤独感や疎外感は、子どもたちにとって大きな不安であり生きづらさをもたらす要因になっているとも言える。「とうめい人間

にも／心はあるんだ／なみだも出るんだ」という表現に、自分が経験した疎外感にしみ出ている。「自分を見てくれている」という、友達のことを経験して初めて「ぼくは、ここにいるよ」と、自分の存在を知らせる勇気が生まれる。おもいやりや支え合うことの大切さを考えさせる一編である。

〈佳作〉

作品名「いのち」 いなみ しんじ

生と死の命の危機を懸命に救おうとする医療現場の一場面を息詰まる筆致で描いた佳品である。危機を脱した患者の「穏やかな息づかい」や眼の「かすかな耀き」、顔面にさす「赤み」など、いのちが息づく尊い瞬間を丁寧に描いている。生命の尊さを改めて感じさせてくれる作品である。

作品名「脱規格」 小田 涼子

店頭に並ぶキュウリには「見た目の美」に基づいた規格があるそうだ。しかし、規格外のキュウリもすべて真正正銘のキュウリ。味も香りもみずみずしさもキュウリそのもの。人間をキュウリに例えていうのもちよつと抵抗があるが、作者も言うとおりの「人間はキュウリではない」「だから規格などいらぬ」。体つき、言葉、習慣、それに「自分にとって大事なもの」「一人一人違っている」。一人ひとりを大切に、こころ豊かな社会を育てようという思いがあふれた佳品である。

作品名「ねえ。」 青木 萌結

「きらきらなみだ」と「きらきらえがお」。小学校1年生なので、おそらく無意識だと思うが、「なみだ」と「えがお」とをどちらも大切なもの、どちらも必要なものと考えているところがすばらしい。そして「なみだ」が「ぜんぶ」でたら、「こころにすきまができて、そこに「わたしのえがお

をあげる」という。そうすると「なみだ」のきらきらが、「えがお」のきらきらにかわる。幼い表現ながら、人の優しさと思いやりにあふれた作者の心がにじみでている。

作品名「ちよつとの『ありがとう』」 北尾 珠羽

「ありがとう」というたった五文字の言葉を、お互いに周りの人たちに掛け合うことで、言うほうも、言われるほうもうれしくなり、気持ちよくなる。ちよつとした機会でも、ちよつとした言葉でも、思いやりを人に伝えることができる。そんな何気ないことの積み重ねが支え合いの社会、心豊かな社会を育てていくことになるのではないか。

作品名「……また明日」 小寺 優菜

ケンカ別れした時でさえ、「また明日」と言えるような友情で結ばれていた友達の心の痛みに気づけなかったこと。心の傷というものが、「当たり前」に見えても癒えるのに時間がかかるもの。そんな友達の孤独や生きづらさを支えていくためには「寄り添う」ことが必要だったことに作者は気づいている。具体的に何かをして助けるというのではなく、ただそばに寄り添うだけでも人を支えることができるというのである。

《審査総評》

前代未聞のコロナ禍の影響もあり、とりわけ学齢児童生徒の部は応募数も少なく、入選に至る作品がなかったことは残念です。童話は小説と違って、あくまでも子ども向けの物語です。子どもに理解できるか、共感を得られるかという事が一番重要です。また、エッセイでもありませんから、自分の意見を述べる場でもありません。しっかりとしたテーマのもと、読み手の想像力を引き出す作品であることが望まれます。

また、作品を書く前に、原稿用紙の使い方や助詞・接続詞の使い方などもう一度確認することも大事です。パソコン打ちの応募作が増えましたが、そのせいかむずかしい漢字が多く見られます。児童文学では、対象年齢以上の漢字は使わないのが原則です。

童話も時代の流れで、ずいぶん変わってきました。乗り遅れないように。

〈最優秀賞〉

作品名「ある晴れた日の風景」

山崎 祐二

新型コロナウイルス感染症のせいで、学校へも行けず家の中での生活を余儀なくされたことで、大人はもちろん、子どもたちにも閉塞感をもたらせました。主人公は、前々から計画して楽しみにしていた家族旅行を自粛しなければならなくなってしまう。わかっている母に当たってしまいう彼女は、エレベーターで車いすの少女に出会います。彼女の車いすを押しして公園まで行くことになった主人公は、足が不自由でも本を読むことで世界中に行くことができるのだと言います。「人って本当はみんな優しいんじゃないかしら」という彼女のことに、主人公はハッとします。わずか

な時間の中で、大きく価値観が変わり、ささやかな幸せに気づく主人公の心の動きが見事に表現された作品でした。

〈優秀賞〉（一般の部）

作品名「花咲かばあちゃん」 藤本 忍

花づくりが大好きな祖母は、皆から「花咲かばあちゃん」と呼ばれています。その祖母が足の骨折から入院した時、ぼくは庭の花の世話を買って出ます。両親も巻き込んだ庭の手入れは思った以上に重労働でした。祖母は退院しても車いす生活になると聞かされ、ぼくは、大好きな花の世話ができなくなったら……と心配します。そこで一発奮起、車いすでも花作りができる作業台を作ろうとホームセンターに走ります。苦心して作った作業台に、家族の愛が込められていました。普段私たちが何気なく使っている道具や施設は、健常者の目線で作られていることが多いのは事実です。

最近、自動販売機のコイン入れがずいぶん低い位置にあることに気づきました。私たちが声を上げることが大事だと思います。

〈佳作〉

作品名「ウサギとクマ」 山下 治美

嫌われ者のクマに、ウサギだけが分け隔てなく親切にしてくれます。私たちは、根拠のない偏見で人との距離を縮めたり広げたりしてしまいがちです。クマは乱暴者でウサギは小心者、キツネはずるくてコアラはのんびり、なんて誰が言い始めたのでしょうか。優しいクマは、自分と仲良くしたために仲間外れにされそうなウサギを思い、会いに行くことをやめます。これは人間世界のいじめの原点を描いています。SNSでの攻撃も同じです。みんながそうするから私も、という主体性の

なさ。誰かを攻撃することで自分を守るという理不尽さ。この作品は、優しさとはどういうことかを問いかける作品です。広い世界で、奇しくも巡り合った者同士、いたわり合って生きていく方がきつと幸せでしょう。

作品名「お友だちに」 阿部 忠彦

ハリネズミとキツネのけんかを、ミミズクの裁判長が裁くというお話です。足音を忍ばせて歩くキツネのことを「襲ってくるつもりだ」というハリネズミ。「何もしていないのに針を立てて刺そうとする」というキツネ。はたから見れば誤解以外の何物でもないケンカですが、本人たちにとっては一大事です。なんだか人間世界にも通じる所があって面白いと思いました。裁判長がどう裁くかが気になりましたが、「友だちになりなさい」というあっけない幕切れでした。裁判の様子が冗漫で少し退屈ですが、裁判長がもう少しウィットに富んだ判決を出してほしかったですね。タイトルをもう少し工夫してみてください。

作品名「森の音楽」 遠藤 里絵

情景描写だけでストーリーが進んでいきます。音符を抱えたりスたちが、木の穴に音符を入れたり、土に埋めたりして、美しいメロディーが生まれる手助けをしているのでしょうか。

雨の音やにおい、風のささやきや小川の流れが、音楽を作っています。一編の詩のような物語ですが、音符を拾った娘が妖精になるくだりは、少し安易で平凡でした。

こういった作品は、比喩や擬音を使って、読者の感覚に訴える工夫が必要です。

ドングリで作ったとち餅とありますが、とち餅はとちの実から作りますね。ドングリですから、ドングリコーヒーなんていかがでしょうか。



最
優
秀
賞

《最優秀賞》

小説部門

蒼空そうくうのかなたへ

稲見 臣二

日曜日のお昼どき。朱里あかりは近所の評判の中華料理店にいた。十席ほどある店内は家族連れでほとんどが埋まっていた。食ベログにもおいしい天津飯を出す店として紹介され、月に二〜三度は訪れ、決まって天津飯を注文する。六十年配の店主もおかみさんも威勢がよく、それでいて細かいことに気がつき、一度入るとまた来店したいと思う店である。

「はい、お待ちどう、天津飯ね。朱里ちゃん、最近は学校も大変だね。道徳に点数つけたり、やれICTだ、おまけに英語まで教える

だつて」

店主は呆れたように話しかけてきた。

「ええ。でも、子どもたち、新しいことに挑戦するの案外楽しんでいるみたいで」

「なら、いいんだがね。オレはやっぱり人様に対する思いやりや優しさを小さいうちからしっかりと身につけてもらいたいね。人生、生きていくには何をおいてもこれが一番だ」

「私も同感です。生きていく上で知識や技能は一定程度必要でしょうが、やっぱり人間関係を築いていくためには、人に対する優しさや思いやりの心を育んでいかないと」

朱里が食事を終え、レジで支払いをしているとドアが開き、車椅子に乗った男の子と女の子が現れた。

「はい、いらつしやーい……」

ドアの方を一瞥した店主の威勢のいい声は、途中から急降下し、空気の抜けた風船のようになった。朱里は二人と店主とを案分して見やった。どちらも「困った」という表情

がありありとうかがえた。女性は遠慮がちに、しかし勇気を奮うようにして話した。

「あの一、この子がプログでこの店を見て、どうしても天津飯、食べたいというんで」

店主は、女性の表情を見て取って、申し訳なさそうに返した。

「わざわざ来ていただいたのにこの時間、あいにくこんなに混んでて車椅子が入れる余地がねえんですよ。悪いんですがね、後一時間ばかりすりやすきますんで、その時にまた来ていただけますかね」

女性は店主のことばを聞きながら、店内を見まわし、「でも、……はい、わかりました」と、後の言葉を飲み込んだ。「坊や、ゴメンね。また、来てくださいよ」、おかみさんも言葉を重ねた。女性の表情は先ほどよりもさらに固くなり、男の子に何事かささやくと車椅子を反転させ店を後にした。店内の客は食事の手を休め事のなりゆきを静観したり、二人に同情するような表情を見せたりした。朱里はす

でに席から立っている自分にその権利がない中で二人に何かできることはないか。今日はたまたま店内が混んでいる時間だったんだ。すいている時間を教えてあげれば。すぐに店主に聞き、その足で外に走り出た。

あちこち探し回り、ようやく近くの公園の木陰で休んでいる二人を見つけ、一息ついた。朱里は店主から聞いた時間帯を記したメモを渡しながら、女性に語りかけた。

「お母さんも大変ですね、車椅子押しながらがんばっておられるんですね。みんなが少しずつ席を詰め合えればよかったですけどねえ。ごめんなさいね」

「あの一私、この子の母親じゃないんです。ガイドヘルパーの宇崎と言います。普段行けない買い物やお店に行ったりしているんです」

朱里は宇崎に謝りながら、少年に向かって、天津飯、サイコーよと明るく言った。そして、気になり宇崎が言いかけて止めたことを尋ね

ると、もういいんです。あなたも気づかれてないようなので、と。

星野朱里。両親とともに住む隣の市から通っている。教育大学を卒業し、ストリートで小学校教員になり、今年四年目を迎えた。赴任した山口小学校では、専科の後、三年、二年と担任し今年はいきなり六年担任となった。毎日は多忙極まりないが、元気な子どもたちと一緒に運動したり、歌を歌ったりと、楽しく張り合いがある。何事に対しても前向きで努力する姿や誰に対しても優しいところが職員にも保護者にも評価されている。

八月末になってから、突然二期から転入生が来ると教頭先生から聞かされた。

「星野先生、転入生の件ですがね、実は障がいがあって車椅子を使うんです。それになかなか話さないらしいんですよ。まあ、くれぐれもお願ひしますよ」

もらった資料を確認すると、名前は江口樹（たゑ）。

前任校は朱里の住む校区の学校だ。下肢にマヒがあり、思うように動かせない。知的理解は問題がなく、発語も特に問題はないが、四年生の頃から学校では緘黙的な状態が続いているという。原因は家族にも専門家にもわからないという。朱里は車椅子ユーザーだからといって特に困ることはない。むしろ子どもたちが障がいのある友だちと直接ふれあうことで学ぶことはたくさんあると思った。

「ああ、それからこの子、トイレ介助が必要なんですがね、それで特別支援介助員の方に来てもらえるようになりましたので。えーっと、名前は古賀潔（こがきよ）さん。じゃあ、よろしく」

九月一日、始業式の朝。江口樹と対面した瞬間、朱里の脳裏にはあの中華料理店での光景がまざまざと蘇ってきた。何も言わず、硬い表情を崩さないままの少年。後を追って公園でガイドヘルパーと話をしていたときも、その表情はまったく同じままだった。「表情」

というものを、まるでどこか遠くの、山の奥深くに置き忘れてきたかのように。

朱里はすでに樹を知っているにもかかわらず、あの日のことは何もなかったかのように振る舞い、珍しくぎこちない対応をとっていた。

「この後、体育館で始業式があり、続いて六年A組の教室で転入生の紹介をします。お母さんは始業式から、いや教室から、あー、どっちだっけ、ちょっと確認してまいりますね」

結局、樹と母親は教室で紹介された。あわせて特別支援助員の古賀も。母親は樹をクラスの一員として受け入れてほしいと話したが、樹は自己紹介はおろか、一言も発せず表情もやはり同じままであった。一方、古賀の話は自己紹介にしては少々長めではあったが、ユニークな話しぶりに子どもたちは大いに喜んだ。

「ワシ、古賀ですわ。あだ名は『よかドン』、よろしく。『よかドン』の『よか』は、九州の

方言で『いいよ』という意味じゃ。『ドン』は英語で『ドントマインド』の『ドン』で『気にするな』という意味じゃ。このふたつを合わせたんがワシのあだ名『よかドン』じゃ。世界中探しても失敗しない人間なんて一人もない。だから、みんなお互い様なんじゃ。口に出さんでも周りからは初めっからちゃんと許されとるんだから。一つ言い忘れてた。ワシはこれからタツちゃんのトイレにつき合うことになる。一緒につき合いたいと思う者は、タツちゃんの許可を得れば誰でも大歓迎だ。ただし、残念ながら女子は出入禁止じゃ。たとえタツちゃんが泣いて頼んでも、無理なもんは無理じゃ」

トイレの話に満場、笑いと拍手の花が咲いた。と見ると、樹の顔にはこれまでの硬さが少しほぐれ、笑みのような表情が浮かんだ。母は登校初日の心配など吹き飛んで、白い歯を見せ笑っている。朱里は古賀の話に笑ったが、クラス担任として子どもたちの様子を気

にしながらも、二学期最大のイベント「山口小第百回記念スポーツフェスティバル」に向けて最高学年として力いっぱいがんばってほしいなどと熱っぽく語った。

二学期の授業もようやく軌道に乗ってきた。樹は授業には参加しているが、相変わらずノートも取らずグループでの話し合いにも参加しない。簡単な質問をしても返事もしない。それでも朱里は子ども同士のかかわりを大切にし、樹に対して思いやりの心で接し優しさを持つように言い続けた。よかドンは樹に何かささやき、業間や昼休みなどには定時的にトイレに連れて行ったが、授業中は教室の後ろの壁に背中をもたげ、じっと腕組みをしたまま動かず、樹の学習の支援などしようとしなない。

タツちゃんの対応に思い悩んだ末、苦肉の策として朱里はちよつと苦手で、自分とは正反対と思っているよかドンに話をしてもらうように頼んだ。それは、無安打で抑え込まれ

ている野球チームが打率0割の補欠選手をダメ元で代打に送り込んだ監督のようであった。はなから期待などしていないが、今の状況を変えるためならデッドボールでもフォアボールでもエラーでも出塁できればもうけもん、といったところだった。

朝の会の「モーニング・インフォーメーション」でよかドンは話をした。

「今日はくどくど言わん。かわりに二つのことを宿題として出す。一つは『障がい』ってなんや。タツちゃんが歩けなくて車椅子に乗っている。『障がい』があるから『何もできへん』『助けなあかん』って思うとるんか。タツちゃんにとって『障がい』ってホンマに自分の足で歩かれへんことなんか。もう一つ、スポーツフェスティバルとかいうの、自分らで考えてやるやつ。せやつたらタツちゃんら走られへん子や遅い子が参加してよかった思えるもんにするにはどないしたらええか考えてみい。考えたり調べたりしたこと、みんなで

しつかり話し合ってくれ」

よかドンの話から数日後、子どもたちは朱里に自分たちだけで学級会を開きたいと申し出た。もちろんよかドンの宿題についてである。朱里は話し合いがうまくいくか気になったが、子どもたちの自主性に任せた。

それから数日後、今年の最大のイベント「第百回記念スポーツフェスティバル」に向けての練習がスタートした。「スポーツフェスティバル」といっても実際には普通の「運動会」と変わらない。ただ、大きく違うのは、『失敗しようが、成功しようが、すべて児童で』というスローガンを掲げ、児童会がすべてのことを取り仕切ってやっている点だ。六年A組には児童会長の佐原雄太（ユータ）と書記の長澤瞳（ヒトミ）がいる。二人は六月からこの大イベントに熱心に取り組んできたが、タッチちゃんが転校してきたり、よかドンの出現があったりして以来、これまでの計画が揺らいできた。

よかドンからの宿題発表会は、いろいろあつて「自主研究発表会」という形での公開授業となった。朱里は授業公開ということでいろいろ思い悩んだが、子どもたちは一向に意に介する様子がない。「自主研究発表会」もスポーツフェスティバル同様、一切教員は関わらないというのが鉄則で、静観しかなかった。公開授業にはよかドンも入った。先生役として教壇に立ったのは児童会長のユータと書記のヒトミである。冒頭、ユータが今日の勉強は先週よかドン、いや古賀先生から宿題を、と言いかけたとき、よかドンでいぞ、よかドンで、と後ろの壁にもたれていた古賀がヤジのような声をかけた。これには先生方も思わず吹き出した。この声がみんなの気持ちを軽くさせたのか、先生役の二人は子どもたちに次々と発表を促していく。最初にヒトミが、こう切り出した。

「一つ目の宿題の『障がい』って何かってことなんです、私は普段この言葉について全

然考えたことがありますませんでした。図書館やインターネットで調べると、難しい言葉なんです。『医学モデル』というのと『社会モデル』というのがありました。このことについて調べた人、発表してください」

「はい。『医学モデル』というのは、体が動かなかつたり、心がコントロールできなかつたり、物事が理解できなかつたりするのはその人自身の問題だという考え方だと思います。この考え方はこれまでずっとあつた考え方で、今も社会に広くあります。ボクもタツちゃんがかわいそうだから助けてあげないといけないと宿題をするまで思っていました」

「私は『社会モデル』についてです。障がいの社会モデルというのは、さっきの医学モデルとは百八十度正反対の考え方で、この考え方には正直びっくりしました。『社会モデル』というのは、最近出てきたもので二十六年の国連総会で採択された『障害者権利条約』の中で出された大事な考え方なんです。障がい

のある人が生活の中で何かしたいと思つたときに社会の側にそれを妨げる壁があるので、それを取り除く必要があるという考え方です。たとえば、タツちゃんのように車椅子を使っている人は道路や建物に階段しかないという目的地までたどり着けないということがあります。この場合、スロープやエレベーターがあれば、タツちゃんだつて車椅子でちゃんと目的地まで行けます。この社会にある壁は物だけでなく制度やこれまでのルールや考え方、思い込みなども含んでいるんです」

「あつ、関連して。朱里先生がいつも言っていることなんですが、階段でタツちゃんがついていたらみんなで車椅子をかいて運んであげればいいんじゃないか、という考え方。それはそれでいいことなんですけど、初めからきちんとスロープやエレベーターがあるとみんなもつと助かるんじゃないですか」

「私は英語に興味があるので、こんな言葉（と言いながら、大きな紙をみんなに見せなが

ら)、とても有名な言葉があります。『Nothing about us without us』。意味は、「私たちを抜きにして私たちのことを決めないでください」ということです。どういふことかという

と、障がいのある人は何もできない、何もわかっていないと勝手に決めつけて私たち障がいのある人の意見を聞かないでやるのは止めてくださいということですよ」

まだ発表しようとして手を挙げている子どもがいたが、ユータはそれを制して言った。「みんな、いろいろと調べてくれてありがとう。ここで『障がい』って何かについてヒトミさんにまとめてもらいます」

「私、みんなの発表を聞きながら、『障がい』って言葉の使い方、二つあるのかなって思ったの。これまで体や心の不自由なことをいうのに使ってたけど、本当はそうした人たちが社会の中でみんなと同じようなことをしようとしたときにそれを邪魔しているもの、社会にある壁のことを『障がい』って使う方がいい

んじゃないかと思ったんです」

二つ目の宿題についてユータが進めようとした時、突然男の子が立ち上がり話し始めた。「そうだよ。『合理的配慮』っていう言葉があるんですけど、この言葉は障がいのある人がない人と同じことをする権利を守るためのツールで、一番大切なことは障がいのある人一人一人と直接しっかりと話をして要望などを聞いてこれまで通りじゃなく、必要ならそれを変えたり調整したりすることだって。だから、気づいたんです、問われているのは本当はボクらなんだって」

問われているのは、【ボくらだ】。教室内のすべてのものが一瞬静止した。そして、ボクが、ワタシが……まさか、ウソ、そうなんだという、心の中のつぶやきが混然一体となつてみんなの頭の中を駆け巡った。そのとき、授業の終了を告げるチャイムがなった。ユータはやや消化不良の感を抱きながらも、短く締めくくった。

「時間が来たので終わります。二つ目の宿題、スポーツフェスティバルにタッチャんらが参加してよかったって思えるようにすると、予行演習までにみなさんにお知らせします」

授業が終わると、先生方は一斉に教室に向かった。自然と急ぎ足になる廊下で口々に公開授業を褒めちぎった。授業に臨む意識の高さ、課題に対する調査力、分かりやすい発表、司会役の進行力と要約力など、朱里の耳には余りある賛辞が届いたが、朱里の心は晴れない。子どもたちが褒められるのは正直誇らしいが、自分が教育信念としてきた人を思いやる心や優しく人に接することなどが今日の授業の中で木っ端みじんに吹き飛ばされた感があった。優しさや思いやりだけではダメなのか。朱里は苦悶した。

一方、大勢の前で見栄を切ったユータだったが、タッチャんは転校して来てから誰とも口をきいたことがない。いくら問いかけて

も、紙に分かりやすく書いても一切答えない。それを長く続けると、辛そうな表情になりしまいには机に顔を伏せてしまう。二つ目の宿題は手つかずのままだ。タッチャんがスポーツフェスティバルに参加してよかったと思えるようになるなんて到底無理だ。予行演習まで時間がない。ユータだけではなくヒトミも児童会役員も窮地に陥った。朱里も気がかりで子どもたちにアドバイスするが一向にらちがあかない。子どもたちは困り果てよかドンに相談に行くと、獣のように唸って答えた。「おまはんら、タッチャんのトイレに一遍でもつき合うた者、おったか。一緒にトイレ行ったら、タッチャん変わるぞ」

よかドンの言ってる意味がさっぱりわからない。でも、もう時間がない。スポーツフェスティバルにタッチャんに喜んで参加してもらうにはどんな方法があるのか、それを見つけないと。一緒にトイレに行くなんて嫌だけど、よかドンの言うようにタッチャんが変っ

てしゃべってくれたら……。ユータはまずは会長の自分がつき合うしかないと決心した。

翌日、よかドンはユータがタッチちゃんをトイレに連れていくこと、トイレの処理をすること、一日五回のトイレすべてにかかわること、そしてよかドンもついて行くことを条件にタッチちゃんの了解を取りつけた。

登校後の一回目のトイレ。タッチちゃんに声をかけ、小さくうなずくのを確かめ、車椅子を押して教室を出ようと、始業前の女の子たちのおしゃべりの群れをごめん、ちょっと通して、と声をかけながら進む。半開きの入口のドアを車椅子のブレーキをかけ、前に回り全開にして廊下に出る。廊下では始業前ということもあって、いつものように低学年の子どもたちの「滑りこみ遊び」。怖い、もし車椅子にぶつかったら。危ない、廊下でそんな遊びをするんじゃないと、つい叫んでしまった。子どもたちは、普段は何も注意されないのという気持ちとあの優しい児童会長から叱ら

れたというショックからとで、あつという間に散ってしまった。これには、よかドンも苦笑した。多目的トイレのドアを開けると、室内灯が自動で点きドアも閉まる。鍵をして便器の前まで車椅子を押し、その前でタッチちゃんを立たせると、タッチちゃんは自分で手すりを持ちながら体の向きを変えズボンを降ろした。そこにはパンツではなく、おむつがあった。ユータは予想だにしていなかった事態に驚きを隠せなかった。すかさず、よかドンがタッチちゃんのおむつを触りながら言った。「知らなかったんか。だれでも赤ちゃんのときははしとったやないか。それがちよつと長いだけや。それに、ワシもそうやが、歳いったらする者よいけおるわ。おおつ、今日はまだ出てないのう。まあ、汗も出てるし念のため替えとくか」

便器に座ってしばらくすると、おしっここの出る音がした。よかドンは心底から喜んだ。「ほおー、出た出た。おむつに出ても、便器

で出ても、嬉しいのう」

ユータはおむつを下げ、両足から外して便器の中に捨てようとする、あかんあかん、それはここやと、よかドンは汚物入れを指し、おむつを新聞紙に包んでビニールに入れて処理するよう指示した。一回目のトイレが終わる教室に戻るとすぐにチャイムが鳴った。ユータは汗びっしょりだった。二回目、三回目もおしっこは出ていなかったが、給食の後の掃除の時間が終わり四回目のトイレのときは大量のおしっこがおむつを重くしていた。ユータは頭ではわかっていたものの焦りながら、後始末をした。その後、新しいおむつを履かせるとき、これまでなかったことが起こった。タツちゃんの両手がおむつを上げようとするとユータの手に重なってきた。それでも強引に上げようとすると、さらに強い力でタツちゃんの手が制止した。思わず笑いをこらえながら、よかドンが、

「ユータ、それ前、後ろ反対やる。タツちゃん

んが違う言うてるんや」と。

そう言われておむつを確かめると、「後ろ」という表示が前に来ていた。ユータはタツちゃんにゴメン、ゴメンと照れながら謝り、おむつを直した。タツちゃんはこれまで一度も見せたことがない表情、白い歯を見せ目を細めながら大きくうなずいた。

ユータは一週間続けてタツちゃんのトイレにつき合った。その間、おむつの中でおしっこをしていることもあったし、ウンチをしていることもあった。そのたびに後始末をしつかりした。最初は始末をすることに正直抵抗はあったが、よかドンがそのつど、「あつぱれ、今日は大成功じゃ。この調子で明日も大噴水上げるんじゃ」「ほほう、今日はえらい少ないのう。明日は新記録を狙うんか」などとふざけたような言い方に、「これって、アタリマエや」と思えるようになり、つき合うことがだんだん楽しくなってきた。その間、ユータはタツちゃんにスポーツフェスティバルの参加

についての意向を確かめていた。

予行演習二日前、ユータら児童会役員は教頭先生と児童会担当の朱里とにスポーツフェスティバルの提案をした。それは、A組B組で競う競技の判定についてである。「速い・遅い」「多い・少ない」という基準で勝ち負けや順番を決めるのではなく、予行演習のときの記録結果と比べてどれだけがんばったかで判定したい、と。これまで経験したことのない判定基準に最初、意味がよく呑み込めなかった先生たちも、ユータたちの説明を聞いていくうちに納得し了承をした。ユータはこう断言した。

「ボクはタツちゃんから車椅子じゃなくて、時間がかかっても自分の足で歩きたいって聞いたとき、これまでのルールを絶対に変えないといけないと思ったんだ」

予行演習は本番の四日前に行われた。開会式で児童会長のユータは、一年生にも分かるように丁寧な今年ルールを説明した。競技

はそれぞれに白熱した勝負が繰り広げられた。中でも全校リレーは全児童が参加し走るため、点数も大きく最高潮に達した。高学年の部の五、六年四クラスで競われる全校リレーは、予想どおりタツちゃんのいる六年A組は断トツのビリだった。それでもクラスのみんなもタツちゃんも、そして朱里もよカドンもタツちゃんが完走できたことを何よりも喜び、本番に向けて闘志を燃やした。

スポーツフェスティバル当日は雲一つなく晴れ渡っていた。百回記念ということもあってか、保護者はもちろん地域の人たちや関係者がいつもの年の倍の人数があった。そんな中、タツちゃんの母親に寄り添うガイドヘルパーの宇崎の姿があった。また、別の観覧席には例の中華料理店の店主とおかみさんの姿も見られた。演技は大観衆を前に大いに盛り上がり、どの競技にも大きな拍手が送られた。子どもたちは予行演習のときよりも良い結果を、という気持ちがあつてか張り切っていた。

先生たちも自分のクラスやチームに自然と熱が入り、大きな声援を送る姿があった。朱里も気合を入れようと声援を送っていると、よかドンが隣の椅子に座り、口を開いた。

「そないに熱っぽうならんでも、ええんちゃいますか」

いつもの調子だ。おおざっぱで粗野な言い方が性に合わない。でも、今回のタッチャンやユータの変容には心から感謝している。よかドンがいなかったら、今日のタッチャンの参加と笑顔はなかっただろう。そして、「障がい」について考える機会も。朱里は声援するのを止め、よかドンに正対して話し始めた。

「いろいろとありがとうございます。悔しいけど、私、よかドン、いえ古賀さんに完敗です。でも、負けてよかったと思ってます。いっぱい勉強させていただきましたから。ユータがタッチャンのトイレにつき合って、いっぱい勉強になったって喜んで言っていたの聞いて、私恥ずかしくなりました。私の

言ってた『優しさ』や『思いやり』ってなんて薄っぺらなものだったかって。『優しさ』も『思いやり』も目標に向かって一緒に取り組んでいく中で自然と生まれてくる感情なんだって。言葉でうまく伝えられなくても通じ合えるものなんだって」

よかドンも素直に返した。

「そりゃあ、よかった。子どもらはいっぱい教えてくれるから。その気で向かえば」

「そうですね。そうそう今、『合理的配慮検討委員会』の設置を提案しているんです」

フェスティバルもいよいよ最後の演技、高学年の全校リレーが始まった。観客だけでなく児童も教員も総立ちで応援した。六年A組はタッチャンまでは他の三チームを大きく引き離しトップ。いよいよタッチャン。バトンをもらったタッチャンは予行演習後自分から練習すると言い出し、自宅の周りをクラスの友だちと何周も歩いた。その成果もあつてか、予行演習のときと比べ数段速くなって

る。後ろから来る三人の走者に抜かれ最後になつたものの、三位との差は予行演習のときの三分の一ほどに縮まった。

次の走者は前との距離が少ないこともあつてか、少し詰めて次の走者にバトンを渡した。また、次の走者も詰めた。こうしてとうとうタスキをしたアンカーは一位にこそならなかつたが、見事二位でゴールした。信じられないことだった。予行演習では断トツの四位だったが、まさかの二位。興奮のあまり、ユータはタツちゃんと抱き合つて喜んだ。

閉会式での成績発表。児童会長のユータは涙ぐみながら発表した。

「総合優勝、A組。学級別優勝六年A組……」
朱里はもちろんのこと、よかドンも珍しく涙ぐんだ。あきらめず子どもたちと一緒に『失敗しようが、成功しようが、すべて児童で』のスローガン通りがんばつて来れたことに感謝した。いろんな人の支えや応援、アドバイスなどによって。終了後、朱里はタツちゃん

とよかドンとともに観客席のお母さんのところに向かった。宇崎もいた。タツちゃんのがんばりやクラスの子どもの話のひとつしきりしたとき、宇崎から明るい声が返つてきた。「朱里先生、気づかれたんですね、周りの者こそが問われてるつて。嬉しいです。これからもよろしくね。私もがんばるわ。みんなに分かつてもらえるように」

そこへ朱里を探していた店主とおかみさんがやつてきた。そして、宇崎のいるのに気づき、軽く会釈をしテレ隠しをするように頭をかきながら言った。

「オレ、申し訳なかつたつて謝りに来たんですよ、タツちゃんに。朱里ちゃんから教えてもらった『合理的配慮』つてーの。あのときオレ、すげなく断つてしまったこと、ありや、まぢがいなく『差別』だったんだつて。おいしい物食べにわざわざ探して来てるのに車椅子だから後にくれつて。他の人には言わないこと、勝手に条件をつけて追いついたん

だから。タッチャん、ゴメンよ。あの後オレ勉強したんだ。まずは店の中の改造だ。テーブルとテーブルの間を広くして車椅子でも余裕をもつて通れるようにしたり、テーブルの高さの調節もね。入口もスムーズに入れるように完全舗装したり。それにお客さんにも相席をお願いしたりね。まあ、これからはいろんなお客さんの声を聞いて、できることはして、もつといい店にしたいと思って。だから、タッチャん、天津飯食べに来てくれよ」と、見回すとタッチャんとよかドンの姿はいつの間にかなくなっていた。かわりに宇崎とお母さんが笑顔で何度もうなずいていた。

九月の終わりの午後のひととき、朱里の周りだけが小さな陽だまりのようにぼかぼかしていた。

突然、号砲が鳴った。見ると朝礼台に児童会長のユータとよかドンに支えられたタッチャんが風船を持って立っている。ユータはみんなに呼びかけた。

「それじゃ、今から山口小学校スポーツフェスティバル第百回を記念して、風船を上げます、みんな準備はいいかい」

はい、という大きな歓声に合わせて、今度はタッチャんがなんとマイクに近づき、【ありがとう】と笑顔で言った。と同時に二度目の号砲が鳴り響き、色とりどりの風船が空に舞った。みんなは大きな歓声を上げながら風船の行方を追った。

朱里は秋の蒼空の遥かなたをいつまでも見続けていた。



《最優秀賞》

随想部門

この思いが届きますように

東条 幸一

病院の職員って、そんなに悪いことをしたのでしょうか。悪い人間なのでしょうか。絶対に悪くない。

長年働いて、そんな思いがつのりました。

私は地方の小さな病院に勤務しています。

本年3月15日、日曜日の昼。私は内科と小児科の救急当番で出勤していました。「入院中のAさんの具合が悪い」そんな連絡が入りました。

この数日前、近隣の病院でコロナウイルス

の感染者が出て、さらに院内感染が広がっていました。

その病院の外来患者が来るかも知れない。そんな心づもりで準備をしていました。

3月16日。AさんのPCR検査の結果は陽性。私が勤務する病院において、新型コロナウイルスの感染者が確認されました。

その日から、いや前日に出るかも知れないと言いついてから、院内は騒然としていました。

そして、病院の状況は一変しました。

そのころは、まだ全国的に感染が広がっていない時で、県内でもほとんど感染者がいない状況でした。

専門家の間でも、ウイルスの性質、感染の状況など、詳しいことが分からない時期でした。

感染患者が出た病院は、外来・救急業務を二週間停止するのが普通でした。

当院も、とりあえず外来・救急業務を一週

間停止して院内を消毒しました。私も椅子やテーブル、ドアなど、拭けるところは再々拭きました。

全国的に消毒薬が不足していて、消毒もさることながら、薬の手配も大変でした。

濃厚接触した可能性がある十数名が二週間の自宅待機に入りました。

外来・救急を停止したその日。さっそく朝からマスクミが来て、病院の玄関先や職員の様子を撮影していました。

病院があるのは小さな街です。テレビや新聞で取り上げられると、地元ですぐに騒ぎが大きくなりました。

顕著だったのが、病院職員とその家族が嫌われたことです。

私は地元の者なので、直接、知人や近所の人からいろいろ聞かれました。

「病院に行っていたが、その患者と接触していたか知りたい」

「自分が大丈夫かどうか知りたい」

「その患者が入院した通路や行動状況を知りたい」

私が利用者の立場でも、そう思うでしょう。しかし、中には相当神経質な人もいました。

もちろん、その患者がどの病棟、病室に入院していたかなども発表していません。

また、濃厚接触者が自宅待機をしていることは発表しましたが、誰かは発表しませんでした。

濃厚接触者は、患者といつから接触していたか、どの程度接触していたか、世間の人は知りません。それが分かったとしても、感染のリスクまでは分析、判断できません。

そのため、濃厚接触者全員が陰性と決まるまでは、病院職員のすべてが危険人物だったようです。

同じところに、他の都道府県で困ったことが起りました。

陽性患者の濃厚接触者の多くが陽性で、そ

の周囲にも陽性患者が発生。そんな例がありました。

そのため、病院職員、その家族も危険人物と思われたようです。

自分の知り合いの病院職員、あるいは近所にすむ病院職員が濃厚接触者かどうか。自分や家族が、病院職員と接触していないかどうか。調べようとする動きがありました。

私個人も、特別な目で見られることがありました。

買物に行った際に、明らかにいつもと違うことがありました。店内で、私を病院職員と知っている人が、こちらを見て、顔色を変えて足早に遠ざかる。そんなことが何度かありました。

病院職員とその子供は、卒業式に出ないでほしい。そんな声もありました。

ある職員は、わざわざ学校に連絡して、病院職員だと断った上で、卒業式に参列しても

良いか確認していました。

別の職員は、大学生と高校を卒業して春休みに入っている子供がいました。二人とも、アルバイトに行っていました。母親が病院勤務と知れてからは、アルバイトを休むよう求められました。

また、ある女性の職員は、夫が会社から「夫婦ともに陰性と確認されたという証明書を出すまで来るな」と言われました。

この時、PCR検査は、依頼してもなかなかしてもらえない状況でした。彼女は陽性患者が入院していた病棟とは別の建物に勤務していて、患者と濃厚接触どころか、濃厚接触者とも会っていませんでした。

しかし、それを証明する手立てはありません。

患者の自宅を訪ねた者も、「来ないでほしい」と言われる家がありました。

私は、部署は違いましたが、何とかしたいと考えました。

「ご心配、ご迷惑をおかけして申し訳ありません。今後ともよろしくお願いいたします」

そんな内容の手紙を書きました。

職員の気持ちを利用者に届くよう、担当者に託しました。

外来での診療を中止している間、電話による処方せんの発行をしていました。来院者には、病院の建物の外に仮設のテントを準備して、そこで薬の処方せんを渡しました。

病院に来たくない。そんな人がたくさんいました。

とにかく、世間から嫌がられて怖がられて。どうしようもありませんでした。

こんなことをしていたら、どこの病院も陽性患者を受け入れなくなる、そんな予感がしました。

当院で起こっていることは、全国で起こる可能性があると推測できました。

一方で、個人情報保護は大切ですが、明らかに濃厚接触の可能性がある人には、すぐ

にでも伝えるべきだと思いました。

対象の患者は、入院する前に外来受診をしていて、一たん帰宅していました。その日は、院外の保険薬局で薬をもらっていました。

保険薬局にも、直接対応した職員がいるはずです。その人は大丈夫なのか。

最悪の場合、そこから感染が拡大するかも知れません。急ぎ、対応を求めました。

後日、濃厚接触者がPCR検査を受けることになりました。場所は当院の端にある部屋。

そこは玄関を通らず、患者や職員と接しないで入れるところです。

ここでPCR検査用の検体を取って、検査そのものは保健所に依頼します。

検体を採取する時間は、ほとんどの職員が知っていました。職員の多くが、院内から見守る中、対象者が次々に車で駐車場にやって来ました。

全員の陰性を心から願いました。

検体採取が終わった後、対象者は駐車場に並んで、こちらに向かつて手を振りました。思わず涙が出そうになりました。

これまで、いっしょに仕事をしていました。みんな誰も悪くない。むしろ、よく頑張ってくれた。

そんな仲間が、遠く離れて手を振っている。こちらは、近寄らず建物の中から手を振っている。

これが現実で、とても遠く寂しく感じました。

でも、心はこれまで以上につながっていると確信できました。

どれくらいの間だったか、はつきりと覚えていません。でも、すごく長く感じました。

そして、今でもその様子は鮮明に覚えていきます。

これから先、対象者、この病院、私たち、世の中。どうなってしまうのだろう、不安でいっぱいでした。

ただ、職場の雰囲気はとても良い方向に向かっていました。

私は、同じ職場に三十年以上勤務しています。職員としての最終盤に、これまで経験したことのない大きな試練を迎えました。

頼りなげだった若い職員が、率先して不慣れで厳しい任務を遂行する。自宅待機者の穴埋めをする。そんな頼もしい姿を再々見かけました。

私が知らない間に、みんなが成長していました。

精一杯仕事をする。職員全員が力を合わせて頑張る。

頑張つて、嫌われて、それでも頑張る。

いつか分かってもらえる。分かってももらえなくても、ただ、やり抜く。

力強い雰囲気は漂っていました。

職員みんなの気持ちだが、必ず世の中に届きますように、そう願いました。

《最優秀賞》

詩部門

あ、い、う、お

吉村

隆

あ、い、う、おお

父は、うなった。低く——。

え？ 何？ どうしたのかな？

ぼくは、とまどった。

認知症状が出て、父は時折、別人になる。

ぼくなり、この病気について学んだ。

まだら症状の法則——

「正常」と「異常」が混じり合っていると、

本の解説にあった。

あ、い、う、おお

父は、うなった。重く——。

体のどこかが痛いのかな？

とまどうぼくに、父の顔に悲しみが浮かぶ。

余命宣告に、父の地球上の時間は限られ、

普段は無表情の父に

「正常」と「異常」が別々に顔を出す。

どちらも父であるけれど、

どちらも父とは思えない。

あ、い、う、おお

父は、うなった。深く——。

「あ、い、う、お」って何だろう？

ぼくは、繰り返し自分に問う。

言葉が不自由な父。

「あいうえお」の発声練習かな？

ちがう。

あ、い、う、お、あ、い、う、お……

もしかして、そうだ。「ありがとう」

ぼくの心に光が走った。そうだ、父は——

「ありがとう」を伝えようとしたのだ。

伝えても伝わらぬ悲しみ。孤独。

でも、ぼくは、「正常」と「異常」の奥の父の人格を見つけた。

「お父さん、ありがとう」

心にいっぱい感謝を声に

ぼくは、父の冷えた手をギュッと握った。

瞬間、父の眼の奥が光り、

パァーッと顔が明るくなっていった。

父が星になる、数日前の出来事だった。



《最優秀賞》

創作童話部門

ある晴れた日の風景

山崎 祐二

「だって、ずっと前から約束してたのに！」

美緒は母にそう言うと、ふてくされて見せたが

「仕方がないわよ」と、母も残念そうな顔をした。

中学生最後の夏に家族で旅行をする事は、美緒が2年生の時から決めていた。

一生懸命に勉強も頑張り、遊びにも行かず頑張っていたのだ。

なのにウィルスのため出来なくなった。

「でも、近くなら大丈夫だから、お弁当を作っ

て公園にでも行こうか」

「いやよ、どこか遠くでなくちゃー！」

「遠くでなくても、きつと楽しいと思うわよ、

美緒もきつと」

「もういい！」

そう言うと美緒は、乱暴にドアを開け外へ出た。

マンションの5階から見える景色は、いつもと何も変わらないように見えた。

でも今年は、いつもと違う夏になってしまった。

お母さんは何も悪くない、お父さんだって残念だったに違いない。そう、誰も悪くないはずなのに美緒は、なんだか悲しくなって泣きそうになった。

ポケットからマスクをとり出しエレベーターに向かうと車椅子に乗った少女がいた。

彼女は同じフロアに住む美緒と同じ年の女の子だ。

いつもは、お母さんが車椅子を押している

のだが今日は彼女一人でエレベーターを待っている。

ドアが開き、乗ろうとした彼女は、車椅子がドアのレーンに当たり上手く進む事が出来なかった。

美緒は、後ろからそつと押してあげ中に入ると彼女は「ありがとう」と、美緒にお礼を言った。

美緒は、何度か彼女と顔を合わせたか、あまり会話をした事はなく、ちよつと戸惑い「何階ですか」とエレベーターのボタンを指さした。

「1階をお願いします」

ボタンを押して、ドアが閉まると少しの間二人は緊張した感じだった。

「今日はお母さんは、いないんですね」と美緒は彼女に話しかけた。

「はい、ボランティアのお仕事があつて」

「そうなんだ、でも一人で外へ出るの大変じゃないですか？」

彼女は困った顔をして

「でも学校に行く時は、いつも一人です」

美緒は失礼な事を言ってしまったと思つた。

「そうよね、ごめんなさい。変なこと聞いて彼女は少し笑いながら

「お母さんと一緒の時もありますよ、でも一人が多いかな」

彼女は美緒と同じ中学生だが、生まれた頃から足が悪く、ずっと特別支援学校に通っている。

美緒は、それをすっかり忘れてしまった自分が恥ずかしくなつた。

ドアが開き降りようとする彼女は振り向き「押してくれますか？」

と言つたので、美緒は彼女のそばへよると車椅子をゆっくり押して外へと出た。

「どこに行くの？」

「この近くの公園。いつもマンションの窓から見える場所」

「あ、その場所なら私も時々遊びに行くのよ。一緒に行ってもいいかな？」

「もちろんいいですよ、一緒に行きましょう」

公園はマンションと道路を一つへだてた所にあるので、すぐに行けるはずなのだが美緒は車椅子の扱いに慣れていないため、フラフラと危なげな足どりだ。

「わりと難しいでしょ」

と、笑いながら話す彼女に美緒は

「車椅子って、こんなに重たいのね」

と、言うのがやっとだった。

いつもなら歩いて少しの公園が、これほども遠いものかと改めて感じ、ついた時は

「時間が、かかっちゃったね、かえって迷惑だったかな……」

「そんなことないわよ、それに親切にされるのって、すごく嬉しいです」

「でも、どこか遠くに行ったりするのは大変だし旅行とかは出来ないね」

広い公園で、散歩やお弁当を食べている家

族を見ながら彼女は

「私は、いつでもいろんな所に旅をしていますが」

そう言うのと静かに目を閉じた。

美緒は不思議そうに彼女を見ると

「それって、どういうことなの？」

「お母さんは、私にたくさんの本を読んでもくれているんです、小さいころからずっと。そして想像の中で私は色々な所に旅をしてきました。日本だけでなくアメリカ、ヨーロッパと色々な国を。時には宇宙や過去・未来まで旅が出来るの。それは、私の足が悪かったおかげだと思っているし、今ではお母さんに感謝の気持ちでいっぱいです」

美緒は、さっきまで旅行に行けなくなり、お母さんに怒った事を思い出して胸が痛くなった。

「それに誰とだって友達になれるのよ。こうやって、あなたとも知り合えたし」

「でも、冷たい人だっているでしょ？ 世間

には車椅子を邪魔だと言う人たちもいるし」

美緒の言葉を聞いた彼女は微笑んで見せ

「私ね、人って本当はみんな優しいんじゃないかって思うの。それを上手く相手に伝えられないから冷たく感じるんじゃないのかな？ あなたも私と会った時、何か機嫌が悪かったみたいだったしね」

「え、気がついていたの？」

「うん、でもね私と出会って話しているうちに優しい気持ちになれたんじゃないのかな、だから話し合って相手の気持ちを理解してあげるのが一番大切だと思う。私は車椅子に乗ってみんなと優しい気持ちに触れ合う事が出来るのが大好き」

そう言って笑いかける彼女は本当に幸せそうだった。美緒は今まで彼女を見るたびに、なぜか可哀そうな人だと感じていた。

でも、そんな自分のほうこそ何が幸せかも感じとれない可哀想な人だと思った。

何も遠くに出かけたり無理に人と触れ合お

うとせず、ごく当たり前のように人へ優しく

なれる。そんな彼女を美緒は、なんて素敵なお人なんだろうと嬉しくなって

「私あなたと、友達になりたい！」

そう言う美緒に彼女は笑い、

「もう、とっくに私たち友達だよ！」

「私、田辺美緒。あなたと同じ中学3年」

「私は、加藤愛。愛だから、みんなからラブって呼ばれているの」

「じゃあ、ラブちゃんって呼んでいい？」

「これからも、よろしくねミオ」

二人は公園に立たずみ、目を閉じたままじっとしていたが、心の中では色んな場所へと旅をしていた。





優
秀
賞

《優秀賞・一般の部》

小説部門

いつかあなたが見る景色

先間 美保子

ザワリ。ザワリ。風が吹くたびに向こうの大きな木の葉っぱ達が重なり合って音を奏でている。

青い空、その下に広がる大きな原っぱ。どこからともなく吹く風に私は思わず自分の身をまかせ。

私は誰もいないここにたった一人だ。

なんて心地よいのだろう。このままこの時が止まればいいのに。

私はいつの間にか眠り、そんな夢を見ていた。

「夢だったんだ。あそこはいつたいたいところだったんだろう?」

夢から覚めた私の頬に静かに伝って流れるもの。そうそれは涙。

もう長い間ここにいる。あの夢とはまったく違うこの薄暗い部屋。

誰とも会いたくない。会うのが怖い。皆が私を笑い、そして攻める。

「麻美、ねえ少しは部屋から出て外の空気を吸ってみない?」

私の事を心配して母が声をかけてくれる。「ありがとう。お母さん。でもね私ここでこうしていたいのに」

私は母にそう言った。

「そうか。でもご飯はしっかり食べなきゃ。テーブルにおいて置くから」

「うん。わかった」

ごめんね。お母さん。母さんが私の事で泣いているの知ってる。母さんにも辛い思いさせてるよね。私ね、ここでこうしていたいだ

なんて嘘。またあの頃のように外に出て、あの頃のように笑いたい。でもね、今はそれが怖い。皆の声が私を追いかけて来るから。

あの日の記憶、それは夏の終わりの体育館。部活を終え帰ろうとしていた私。

「あ、体育館シューズ忘れた。先に帰ってて」

そう友達に言って体育館に向かった。

あった。あった。これ忘れたら母さんにとやされるからなあ。明日休みだから休みに絶対に洗う約束だから。

シューズを取って帰ろうとしたその時、体育館の倉庫から物音がした。なんだろうと近づいてその倉庫の扉を開けた。

「ちよつとアンタ達なにしてるのよ？」

私は思わず声を出した。

中にいたのは同じクラスの数名の女子達。あまり話をしない仲だがそのメンバーはいつも連んでいるイメージがある。その数名の女子は真ん中にいる誰かを足で蹴りつけていたのだ。その誰かとは、クラスいち人気のある

河合さんだった。彼女は頭がよくて優しく、皆から好かれている。その彼女がなぜ？ 彼女の私を見る目は怯え、服も破れかけている。「佐川さん、なんでここに居るの？ 部活終わったんでしょ。とつとと帰りなよ」

私はそのメンバーの一人がいった言葉にハツとした。この人達は河合さんをいじめている。ここで私が帰ったら彼女はもつとやられてしまうだろう。

あの時そう思った。それが間違いだっただろうか。あの時見て見ぬふりをして帰っていたら私は今、笑って毎日を過ごしていたのかもしれない。運命の分かれ道だったのだろうか？

「帰れるわけないでしょう。先生を呼ぶわ」

「先生を呼ぶそうよ。河合さんそれでいいかな？」

「佐川さん、先生呼ばなくて大丈夫です。私なんともないから」

確かに彼女はそう言った。

「なんともないって。制服だつてドロドロよ。唇だつて少し切れてるじゃない」

「佐川さんさ、河合さんが大丈夫つってんだから大丈夫なわけよ。さっさと帰れ」

そうして私は倉庫からしめだされた。

「これは絶対にヤバイ」

私は体育館を出て職員室に走った。田上先生を見つげ状況を話し先生と再び体育館の倉庫に戻った。

「佐川、本当に河合ここで乱暴されていたのか？」

「先生。私、確かにここでアイツらにいじめられているの見たんです」

「皆、逃げたつてわけか。しかし、あの子らがそんな事するとは思えんがな」

先生はもぬけの空になった倉庫を見て首をかしげた。

「先生、本当なんです。河合さんとこに連絡して大丈夫か確認して下さい」

「わかった。今から連絡して様子みてくるか

らお前は家に帰れ」

「わかりました。もし警察に行くなら私ちゃんと証言しますから」

「警察つて。そんな大げさだろう」

「先生はあの現場を見てないから、大げさつて言うんですよ」

「わかった。わかった。連絡取つてからお前にもた連絡いれるから」

そう言われ私はドキドキする胸を押さえながら帰宅した。

「もしもし、佐川か、さつき河合と連絡取れたんだが、お前の言つてるような事はいっさいなかったそうだ。河合がそう言つてる以上あの子らにも確認しようがない」

「えっ？ それつて本当ですか？ 私この目でちゃんと見たんですよ。真実です」

「そんな事言われても。まあ、とにかく明日様子を見るから、このことは誰にも言うなよ」

先生からの電話を切つた私は、なにが何なのかわからなくなつていた。

「おはよう。ねえ、ねえ河合さん昨日の宿題でわかんないところあるんだけど教えてくれないかな？」

「あ、いいわよ」

昨日の事がなかったも同然のようにアイツらと河合さんは普通に話を交わしている。

「佐川、ちよつと」

先生に言われ教室を出た。

「な。なにもなかったんだよ。でなきやあんなに普通にできないだろう」

「でも先生」

「とにかく、様子みてまた何かあったら連絡くれ。俺もちゃんとみとくから」

あの時先生はそう言った。俺も様子見ておくからって。

それから何日かして河合さんがこの教室に来なくなつた。何日も。何日も。

「河合さん、どうしたのかしらねえ。今、流りの不登校ってやつじゃない」

そう言つてアイツらがクスクス笑つてい

る。

あんた達のせいだ。絶対に。私は心の中でそう叫んだ。

「そういえば河合さんて、田上先生の事が好きだったみたいよ」

アイツらの一人がそう言った。

「それ、マジか」

後ろで聞いていた男子が反応してアイツらに話を聞きにきた。

「そうよ。この前、河合さん、田上先生、素敵つて言つてたもん。でもさ、田上先生この前から佐川さんの事よく呼んでなんか話してるよねえ」

えっ？ なんの事？ 私と先生の事？

「あんたらしい加減にしなよ」

友達のミサが庇ってくれた。

「あんた達のせいで河合さん学校に来れなくなつたんじゃない。私、見たんだよ。あんた達が河合さんいじめているところ」

私は声を上げた。

一瞬教室の空気が固まった。

「へくそんな証拠どこにあるんですか？ 佐川さん。そんな事より私さ教室から廊下のご写真に撮ってたら、あんたと先生なんだか親密に話してたよね。たまたま写真に撮っちゃって。それを河合さんに見せたんだ。それからかなあ。河合さんが学校に来なくなったの」

一瞬固まっていた教室が再びざわついた。

「それが、この写真」

そうならもう手のつけようがなかった。

「見せて。見せて。これって怪しいかも」

「でしょう」

写真は一齐に拡散された。根も葉もない嘘のコメントとともに。

「麻美。大丈夫？」

友達が心配そうに私を見ていた。

「やめて。お願いだから」

一度、拡散された写真と嘘のコメントはど

こまでも広がっていった。想像を超える勢いで……。

その夜、田上先生がうちに来た。母と長い間、話をしていた。先生は私にこう告げた

「河合が自殺を図ろうとしたそうさ。幸い命はとりとめた」

私の中で何かが音を立て崩れていった。

私は頑張って学校に行ったがもう歪められたままの学校生活。修正がきかない。

「佐川のせいで河合が自殺を図ったらしい」

「佐川って見た目以上にキツイ事するよな」

私は何もしていない。ただあの時、河合さんを助けようとしただけなのに。人として当たり前前事をしただけなのに。私のした事で田上先生まで巻き込んでしまった。もうどうする事もできなかった。

だから私はあの時からこの部屋から出られなくなつた。田上先生が何度も来てくれたが、またあの嘘の噂が再び出廻るのが嫌で会えなかった。もうどうにでもなればいと心

からそう思った。

田上先生が学校を辞めたと聞いたのは随分と後の事だった。先生は若くて熱血教師だった。私の事を救おうと何度もここに足を運んでくれたのに私は会う事も拒んで先生は学校を辞めた。

先生にも夢があっただろうに。あんな写真や嘘で塗り固められたコメント拡散されたら先生だって学校にいられないよね。ごめんね、先生。

私は、何年もこの部屋で襲ってくるアイツらの声や拡散された写真と嘘のコメントのせいで毎晩、悪夢をみていた。気が狂いそうにもなっていた。どれだけ母を苦しめたか。

何年かたった今は少し落ち着いてきている。少しずつではあるが食事を取りながらテレビも見れるようになってきた。友達からの電話も出られるようになってきていた。

あの時この部屋に逃げた私。逃げた事が悪いのか？ 悪くないのか？ 今、思うとき

と後者のほうだと思う。あの時、逃げなければ私はもっと酷く傷つき再生できなかっただろうから。

「少しずつでいいのよ。あなたらしく生きれるようになるから。焦らなくてもいいの。お母さんがついててあげるからね」

そう言う母の言葉にどれだけ救われたか。少しずつ。そうだ少しずつ。それでいい。

いつの間にか私は二十才の誕生日を迎えていた。あの頃の友達は中学そして高校を卒業し大学生活を楽しんでいると聞いた。私は一人置き去りにされたまま。そんな虚しさの塊だけが、心に漂う。

「麻美二十才のお誕生日おめでとう。今までよく頑張ったわね。もうこれからは大人の女性として進んでいかなきゃね。いいの麻美のペースで。これからも、ゆっくり。ゆっくりとね」

そう言うって母は誕生日のお祝いに、化粧品をくれた。

「お母さん、ありがとう。今まで支えてくれて。もうここから抜け出さなきゃね」

母は私がこの部屋にこもってからずっとそばにいて支えてくれていた。他の子達が中学を卒業する時も、高校に入学する時も、そして大学生になったと聞いた時も、なぜうちの子はその瞬間その場におられず、その喜びも与えられなかったのだろうか？ きっと母は母自身、自分を責めただろう。

そんな母のために、もうここから出よう。二十歳になった私は心を決めた。

それから私は通信制の高校で高校卒業の資格を取った。そして短時間ではあるがコンビニのアルバイトも始めた。

長い間、母以外の人と話をしてこなかった私は、コミュニケーションが取れない人間となっていた。

それでも自分のペースで一歩ずつ前に進んでいる私を母は誉めてくれた。

「いらっしやいませ」

私は少しずつ慣れてきた仕事に今日も頑張っていた。そんな時だった。店に入ってきた数名の大学生達。その中の一人の男性が私の顔を見てこう言った。

「あ、あれ、お前、佐川だよな」

そう言ったのは紛れもないあの中学の時の同級生の中野だった。その時、その瞬間体が固まった。やっと抜け出したのに。やっと人並の生活が出来るようになったのに。涙が知らず溢れてきた。

ここコンビニから逃げようとした。逃げてまたあの生活に戻ろう。でも足がすくんでそこから動けなくなった。その時、彼が私にこう言った。

「佐川、あの時、本当にごめん。謝ってすまされると思わないが。ちよつと外で話をしないか？」

「えっ？」

中野が私にゴメンと言っている。そして話をしたいと。

私は店長に頼んで休憩を取らせてもらい中野と近くの公園に行った。

季節は夏から秋に変わろうとされていて心なしか涼やかな風が頬にあたる。

私達はそこにあるベンチに座った。

「佐川、あの時から俺はずっと胸のモヤモヤが取れなかった。皆でお前と先生の写真を見てはやし立てた。あの時からずっと。もちろん写真を拡散させたのも、コメントつけたのも俺じゃあないけど。それでもお前が来なくなったあの日からずっと。なぜお前があそこまで世間に晒されなければならなかったのか。自分はその場においてはやしたてただけだ。俺は何もしてない。そう正当化しようとしたが胸が痛かった。あれからお前、家から出られなかつたんだよな。お前の事が気になって何度も家の前まで行つたんだ。お前の部屋いっつもカーテンが引いてあつて。あ、ゴメン。ストーカーってわけじゃないから。ずっと謝りたかつたんだ。家のチャイム押す

勇氣もなくてさ」

「私……」

「いいんだ。ムリに話そうとしなくても。また少しでもいいからこうして会わないか？ お前の働いてる姿みれて嬉しかった。てか、お前なんだか綺麗になったな。あ、ゴメン。素直にそう思っただけだから」

中野はそう言つて微笑んだ。私達はそれから度々会つて話をするようになった。

中野は大学でSNSの危険性について学んでいて、より安全を追求している事や、大学という所は中学や高校と違って自由だという事も教えてくれた。そしてこれはいらぬ情報だが今俺には彼女がいらないという事も教えてくれた。

「ねえ、お母さん、秋という季節には何色の口紅がいいのかしら？」

「そうね、母さんはピンクに少し紫を混ぜるといいと思うよ。紫の口紅、母さん持っているからお母さんのを使いなよ。ねえ、麻美っ

て最近なんだか綺麗になったね」

そう言つて母は嬉しそうに自分の部屋に口紅を取りに行つた。

季節は深い秋に入つた。もつぱら私は中野と沢山会話をしたし、彼の通う大学の学祭にも行つた。最初は同じ年代の子らの中に入つていく事に抵抗があつたが、「大丈夫だから。俺がついているから」そう中野が言つてくれたから。中野の大学の学祭は活気に溢れていた。今時の大学生らしく皆若く弾けんばかりだった。あの時あの部屋に逃げ込まなかつたら私もこんな大学生生活を楽しんでいたのかな。そんな思いで皆を見ていたとき、

「よお、中野、お前、彼女できたのか？ なかなか可愛い子じゃん」

そう言つて、一人の男子学生が私達に近づいて来た。その学生は私の顔をじいっと見て、

「お前、佐川だよな。あの、先生と噂があつた。お前の今度のターゲットは、この中野く

んですか。いや〜まいったな〜」

この顔に見覚えがある。あの時の同級生だ。来なければよかつた。またあの時の写真でもスクロールされ出されたら。恐怖が襲つてきた。と、同時に中野がその同級生の頬めがけ殴りかかつた。

「もう、やめろ。こいつがあゝの時の事でどれだけ苦しんで、今の生活に戻るまでどんだけかかつたか。あの時あそこにいる俺らに罪はないつていうのか？ その上またこいつをあの暗い部屋に陥れるつていうのか？ こいつがなにをしたつて言うんだ。ただ、ただ俺らと同じ時代を生きていただけじゃないか。お願いだからもうやめてくれ」

中野の目から次から次に大粒の涙が出ていた。

「あ、すまん。そんなつもりじゃ。ごめんな佐川」

その同級生はバツが悪そうに殴られた頬をさすりながらその場を立ち去つた。

中野は悔しそうに歯を食いしばり、顔を上にあげ、流れる涙を必死で隠そうとしているかのようだった。

「中野君」

私は彼の手をギュッと握り締めた

「麻美ごめん。またイヤな思いさせたな」

「いいの。もう大丈夫」

中野が私の事を佐川から麻美って言ったその瞬間、私の中で、もう大丈夫。私を守ってくれる人がここにいる。そう心強く思った。秋が終わる頃一通の手紙が私宛に届いた。

佐川さんへ

お元気ですか？　なんて話を切り出してよいかわかりませんが。あの時あの倉庫であなたが見た事は事実です。そう、私は彼女達に日々いじめられてきました。いじめの原因は私の母が彼女達の万引きをみて注意した。それが原因でした。最初は軽いいじめだったんです。「お前のオカンのせいだ」ってなじら

れたり、モノをかくされたり。それがだんだんエスカレートしていつて、原因が原因だったのを母を傷つけたくなって。だからあなたに見られた時も母に知られるのが怖かったんです。私さえ黙っていれば、皆が普通にしていられる。この中学生活も、もう少しで終わるのだし、高校も違う高校になるだろうし。そう、今、思えばおかしな考えですよ。でも、がまんももうしんどくなって。学校に行けなくなっただんです。学校から逃げたんです。がまんした私のせいで次はあなたがターゲットになった。私は自分を責めました。私を助けようとしてくれたあなたを助けずに、自らの命を絶とうとしました。なんてあさきかで愚かな事だったでしょう。それから私は精神的におかしくなり長い間、精神科病院に入院していたんです。あなたの事をずっと思いながら。本当に申し訳なかつた。でもあの自殺未遂で命が助かって、精神科病院での治療のいかいもあって私はようやく人並の生活

が送れるようになりました。今はお世話になったこの精神科病院で私のように深い傷をおった方々のケアをさせてもらっています。この手紙を読んでいるあなたが暗闇でさまよっていなればよいのにな。と願いながらペンを走らせております。これは私の勝手なお願いなのですが、もし、よかつたらお会いできませんか？ 私の連絡先を書いておきます。あなたを深く傷つけた私を許してもらおうとは思いませんが。ただ私と話をする事でもあなただけの助けになるのであれば。

河合

手紙を読んでいた私の目から涙が溢れ出した。河合さん、あなたも苦労したんだね。元気で仕事されているんだ。よかつた。河合さんは私を傷つけてなんかないよ。私も河合さんも傷つけられた仲間だよ。私達は同級生にされたあさはかで卑劣な行為でお互いに人生を失いかけた。やった奴らは何気なく、ただ

簡単に、人をののしり、人を蹴りつけ、人の写真を撮り、嘘のコメントを拡散させただけ。いとも簡単に。それなのに、やられた方の人間は傷を深く負い、抜けたくても抜けれない日々を過ごし、自分の傷を舐めながら少しずつ少しずつ這い上がって。

それがどんなに困難で辛い事なのか。そう、それは、私や河合さんのような人でなければわからない。絶対に傷つけられた者にかかわらない。

心の中で河合さんにそう訴えながら、彼女に会おうと決意した。

「ねえ、中野君、一緒についてきてくれてありがとう」

「麻美、いいの。いいの。俺、暇だから。でもさ昨日大学のサークルの後輩女子にデート誘われたんだけどな。めっちゃ可愛い子でさ。断ったんだ。もったいなかっただけ」

ニヤついた中野のほっぺを思い切りつねっ

た。

「痛い。嘘だつて。俺には麻美しかないって」

「バーカ」

私はなんだかとても腹がたつてそう言つた。

遠くから長いコートを着た女性が現れた。あの頃と変わらない美しさを持った河合さんだった。少し痩せたかな。

「佐川さん連絡ありがとうございます。あ。あなた、中野君？」

「そうです。麻美のボディガードです」

「そっか。素敵な彼氏さんね」

「いやいや河合さん、俺の事、素敵なだなんて」

中野が嬉しそうにやけて言う。

それから私と河合さんは沢山の話をした。私達にしかわからなかった苦しみや、悲しみ。這い上がって来たからこそ、そこにあった幸せの事。河合さんは自分を支えてくれたのは

田上先生だった。そう話をした。河合さんが自殺未遂を起こしたのは自分のせいだと、先生は学校を辞めてからも、ずっと彼女の見舞いに来て、彼女を支えてくれたのだと。

そして彼女は話の終わりに自分のお腹に手をあて、愛おしそうに、ここに新たな生命が宿ったことも教えてくれた。もちろんその新しい生命の父は田上先生だという事も。彼女は幸せに満ちていた。

彼女と別れてから中野が私を連れて行きたいところがあると、この場所に連れてきた。

その場所は青い空の下に広く広がる原っぱ。向こうには、そびえ立つ木々が風が吹くたびにザワリ、ザワリと葉を重なり合わせながら音をかなでている。

「ここは。私が夢で見た場所だわ。なんで？」

「そうなのか。俺さ、この場所すごく好きでさ。いつか好きな奴できたら絶対に連れてこ

ようと決めてたんだ」

「中野君」

「お前の次、連れてくるの、あの可愛い後輩にしようかな。あ、今のもウソだからほっぺつねんなよ。ここに連れて来るのは麻美、お前だけしかないよ」

再び風が吹いて、さつきよりも大きくザワリ、ザワリと広い原っぱに音が響き渡った。

それは心地よく聞こえ、まるで私達の愛を祝福しているかのようにだった。

あの暗闇の中にいた、あの頃の私へ

どんなに辛く悲しい日々が続いたとしても生きて下さい。

いつかその暗闇の闇は薄れていき、必ずあなたを救ってくれる人が現れるから。

今が辛くても生きて這い上がってきたら、そこにあなたが見たい景色が広がっているのだから。必ず生きて下さい。

少し未来の麻美より



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

小説部門

過ち、償い

加藤奈乃葵なのい

電車の窓から景色を見ている。空は晴れ、桜はまだ満開になりきれしていない。すぐに視界から消えていく建物や、ゆっくりと動く山々をただぼんやりと眺めている。

彼は今、どんな気持ちなのだろう。そう、考える。俺は……。不安だ。今すぐ家に帰りたい。だが、そうすることはできない。いや、してはいけないのだ。同じ過ちを繰り返してはならない。俺はもう逃げない。勇気を出さなければ。そう、今度こそ……。

「タク、大事な話がある。夏休みに、引越しをすることになったんだ」

俺は一瞬思考が停止した。

「え？ ……マジで？ 引越しするの？」

え、じゃ、学校は？」

「転校することになる」

俺は、申し訳なさそうな顔をしている父さんと母さんを見た。

「ごめんね。タク。でも、父さんの仕事の関係でどうしてもなの。本当に、ごめんね。先生にはまた連絡しておくから」

「うん……わかった」

今聞いたことがまだ信じられないまま俺は階段を上がり自分の部屋に入った。ベッドに腰掛け、そのまま上体を倒す。色々な思考がぐるぐると回っている。来年には6年生になるのだ。修学旅行……当然のようにみんなで行けると思っていた。小学校最後の年。みんなと、思い出をたくさん作って、みんなで元の中学校に入学して……。転校した先で

は、うまくやれるだろうか？ 俺はそこまで
コミニケーションが得意ではない。もちろん
今の学校には友達がたくさんいるがそれは1
年生の時から一緒だったからだ。知らない人
ばかりの所でなじめるだろうか……。

そして知らぬ間に、俺は眠りに落ちていた。

引っ越しをして1ヶ月ほどだった。はじめ
は引っ越し、転校に不安が多かったが、父さ
んや母さんと色々と話し合って、この事実を
受け入れられるようになった。もちろん友達
と離れたのは寂しいが、みんな笑顔で送って
くれた。

この学校でも何人かと仲良くなった。松田
翔也が一番はじめに話しかけてくれた。「翔
也、でいいよ」彼はそう言った。優しい声と
目をしていた。翔也の家は学校への道の途中
にあるので登下校を一緒にするようにもなっ
た。お互い幼なじみだという森君と鈴木君、
隣の席の水谷さん、その友達の上野さんとは

時々雑談をする仲だ。なかなか上手くやって
いる——俺はそう思った。けっこういい感じ
じゃね？ 俺。と、少し浮かれているのも自
分で分かっていたが悪い気はしなかった。

この幸せが、ほんの一瞬で終わってしまう
ものだなんて、この時には知る由もなかった。
はじめに異変を感じたのは10月の終わり頃
だ。俺はいつも通り教室に入ろうとした。
が、鍵がかかっていた。教室の中には人がい
る……開いているはずだ。と、誰かが鍵をあ
けドアを開けた。

「ごめんごめん！ 間違えて鍵しめてた
わー」

そう言ってきたのは井坂君だ。

「ああ、うん、大丈夫だよ」

軽く笑いながら俺は言う。

これだけならまだ、何とも思わずただ間違
えただけだと思っていただろう。だが数日
後、消しゴムが筆箱から消えていた。自分で
なくしたのだろうと思った。また数日後、給

食の牛乳が泡々だった。何人かに言うとは、自分の普通だったと言った。誰かが俺のを落としてもしたのだろうと思った。また数日後、鉛筆の芯が全部折れていた……たまたま自然になったのか？ いや普通こんなに折れるか？ もしかして、誰かが意図的に？ いやいや、そんな訳ないし。だったら誰だよ。意味ねーじゃん。こんな事しても。いじめ？ とかありえねーし。偶然だよな。そうに決まっている。

だが、このときの悪い方の考えは当たっていたのだ。

「そういうこと」は、じきに毎日、起こるようになった。それも「偶然」では通らないものになってきた。そしてそれをしてくるのは、一番はじめに異変を感じた、井坂君、その友達らしい下崎君だと分かった。犯人がわかって俺にとつて何もいい事はなかったが。

鉛筆を真つ二つにされた。消せば跡も残ら

ないような薄い字でノートや教科書に悪口を書かれる。俺が消すのを分かっているからだろう。すれ違いざまに耳元で、他の誰にも聞こえない声で悪口を言われる。誰にも見られないよう、つねられる、足を踏まれる。靴や机の中に虫を入れられる。

大人たちは気づかない。物を壊されるのは頻繁ではない。鉛筆も真つ二つはあの一回きりだ。虫も一度に多くは使わない。あいつらは確たる証拠を残さなかった。クラスのみんなも、気づいてないだろう。

なぜ、俺が。俺が転校生だから？ それだけか？ 俺が、何かしてしまったのか？ いや、何もしていない。じゃ、やっぱり転校生だから？ なんだよそれ。そんな理由になつてねーじゃねえか。

辛い。こんな事になるなんて。学校に行きたくない。また明日も泣きそうになるのを必死にこらえて普通の顔をしながらノートの悪口を消すのか。字が薄くつたつて殺傷力は変

わらない。あいつらのメリットでしかない。慣れることなんてない。毎回毎回、心をえぐられる。孤独だ。でも、母さん、父さんには絶対打ち明けたくない。でも、だれかに分かってほしい。でも、知られたくない気もする。俺は、どうしたらいいんだ……。ああ、誰か、教えて。助けて。

6年になってから1ヶ月がたった。俺はいつも通り登校する。あいつらは朝は早く来ない。俺はあいつらに会わないように少し早めに家を出ている。途中で翔也と合流し、しばらく歩くと学校に着いた。上履きは……今日は無事だ。教室に入り、数名と軽く挨拶を交わしながら自分の席につく。ランドセルの机身を机に移す。と、机に何か入っている。机を覗き、それらしき物を見つけた。丸められた紙だ。見たくない、見ない方がいい……。だが見てしまった。やはりそこには罵詈雑言があった。表情ひとつ変えず、だが心はぼろ

ぼろになりながら、誰かに見られる前にさつさと消しゴムで消し、ゴミ箱に捨てる。誰か、分かって欲しい。でも知られたくない。こんなみじめで弱い自分。

いつも通り授業を受け、給食を食べ、午後の授業とホームルームを終えた。靴の中に入れていた物をさりげなく捨て、翔也と一緒に学校を出る。

「なあ、今日俺ん家来ない？」

翔也がどこか奇妙な声で聞いてきた。いや、気のせいかな。翔也とは、たまに遊んでいる。特に断る理由もない。

「ああ、うん。じゃ、すぐ家行くわ」

その言葉通り俺は帰って母さんに行き先だけ伝えて家を出た。しばらく歩いて翔也の家につく。インターホンを鳴らすと翔也が出てきた。彼の親は共働きだという。だからお母さんもお父さんもほとんど会ったことがない。

2階の彼の部屋にあらせてもらい、すぐ

に翔也がカルピスとポッキーを持ってきた。礼を言ってカルピスをふた口飲む。翔也は、ベッドに座り、黙ったまま何か考え込むような顔をしている。

「翔也？ どうかした？」

こちらの顔をちらりと見てまだ黙り、そして口を開いた。

「なあ、泰久、お前、いじめられてる？ 井坂と下崎に」

「え……？ なんで？」

「昼休み、井坂と下崎が泰久の靴に何かしたのを見たんだ。あと、昨日の放課後、泰久の机に何か入れてて……」

こうなる事を望んでいたのか、いなかったのか。自分でも分からなくなって黙ってしまった。

「……やっぱり、そうなのか？」

こくり、と頷いていた。情けない。恥ずかしい。同時に、ほっとする自分もいた。

「いつから？」

「一番、はじめは、十月末くらい……」

「じゃ、六ヶ月も？ なんて気づかなかったんだ……」

「あいつらは、証拠が残るようなことはしないんだ」

俺は、あいつらが使った手口を話した。

「そうか……。ごめん、気づいてやれなくて」

「いや、謝る事じゃないよ。俺ももつと、早く誰かに話すべきだった。でも、弱い自分を知られたくなくて……勇気が出なくて……」

「泰久は、弱くないよ。だってずっと一人で耐えてきたんだから。これからは、俺も力になるよ」

「……ありがとう」

声が震えないように必死で絞り出した言葉は、小さくて、俺の気持ちの半分も伝えられなかった。

いじめを知ってから彼は何度も、井坂達にやめろよと言った。だがいじめは一向に無くなるなかった。それでも俺は、翔也がいてく

れるだけで、気持ちが楽になっていた。

そのまま二ヶ月ほどたち、夏休みになった。

翔也と遊んでいた時だ。日陰でジュースを飲みながら休んでいると、翔也が口を開いた。

「あのさ、やつぱり、大人に言おうよ」

「え、な、何を？」

「……井坂たちのこと」

「なんでさ」

「だって、俺が何度止めても無くならないし、やつぱ、先生か親に頼るしかないだろ……？」

「気持ち嬉しいけど、それはいいよ」

「なんで？ 嫌じゃないのか？」

「嫌に決まっているだろ、あんなの」

「じゃ、なんでだよ」

俺の母さんは昔、いじめられていた。今は立ち直っているが、しばらくは人と話すのが怖くなるくらい、ひどいものだったらしい。母さんにこんな話を聞かせてかつての恐怖体験を思い出させたくない。そして悲しませたくない。

「……別に」

「なんだよ！ 理由はあるんだろ？ 言ってくれなきゃ納得できないよ」

「……とにかく俺は、それを望んでないんだ」

「だからなんでだよ！ あいつらにちくんなんて言われたのか？ それとも大人を信用していないのか？」

「違う」

「……なあ、俺はお前を助けたいんだよ。それには大人に言うしかないんだよ」

「助けなくていいよ。本人がそう言うんだからいいだろ」

「よくねえよ！ 見てる方だって嫌なんだ。たぶん他にも気づいてる人もいる。もう終わらせようぜ、こんな事」

「うるせえな。いって言ってんだろ！ しつこいな。もうほつといてくれよ」

「助けたいって言うてるのにうるさいはないだろ！」

「どうせお前が楽になりたいだけだろ！ も

う話しかけんな」

俺はさっき買ったコーラを持って自分の家に走った。母さんが驚いた顔をしているのも無視して自分の部屋に上がる。腹が立って仕方なかった。なんで分かってくれないんだ。言いたくない理由も察してくれよ。……寝転がって考えるうちに頭がぼんやりしてきて、やがて虚空を見つめるだけになり、いつのまにか眠っていた。

夏休みが明けた。いじめはやはり続いていた。心の支えである翔也も自ら切り捨ててしまった。翔也にはあれ以来会っていない。謝らないといけない。そう思った。朝、今日は翔也の家には寄らず一人で来た。放課後に、謝ろう、と決めていた。

そして放課後。翔也の姿がどこにもない。靴は下駄箱にまだある。だから学校内にいるはずだ。だがどこを探してもいない。もう一度下駄箱を見ると、靴がなくなっていた。すれ違ったのか。残念、と思いつながらもどこか

安心している自分がいるのを俺は都合よく気づかないふりをした。

翌日はタイミンがつかめず謝れなかった。翌々日も、その次も……。俺は結局、勇気がないんだ。タイミンがつかめないのも、係の仕事があつて忙しかったのも、言い訳をしているだけだ。俺は弱い。自分でも分かっている。

結局、謝れないまま一ヶ月が過ぎ、十月に入った。そして突然、いじめがなくなった。なぜかは分からない。だがそれはもちろん俺にとつて良い事だった。俺の生活には平穩が訪れていた。ただひとつ、翔也と仲直りができない以外は。

そして俺は、小学校を卒業してもまだ、翔也に謝罪を述べることができなかった。

中学校では学年の人数が増え、クラスも増えた。翔也とは違うクラスになった。幸い井坂と下崎とも違うクラスだった。中学校は小学校とは方向が逆なので登下校中に翔也の家

を通ることもなくなった。

俺は俺のクラスで、新しい友達もでき、まあまあ楽しい生活を送っていた。自分の気楽にしたいがために、翔也は翔也で楽しくやっているだろうという非常に自分勝手な妄想もしていた。

六月も半ばを過ぎた頃、聞き捨てならないある噂を聞いた。翔也が、井坂と下崎にいじめられているというのだ。嘘だろ、と思った。翔也は、俺と違って強い。彼がいじめなんてものに屈するわけがない。きっと、彼ならば、彼ならば、大丈夫だろう。俺はまたしても自分を楽にするため、自分勝手な想像をした。そして真相はわからないまま、夏休みに入った。

そして事件は起こった。

俺は中学から通い始めた塾の帰り道を歩いていた。橋を渡っていると、川に人影が見えた。俺の顔から血の気が引いた。俺の目に映ったのは、井坂と下崎に川につけられ、も

がいている翔也だった。苦しいだろう。俺でもあれ程酷い事はされなかった。助けなければ。昔俺が助けてもらったように。だが俺の足は恐怖にすくみ言うことを聞かない。おい、どうした。早く助けないと。動け。せめて大声でも出せ。その場に突っ立ったままでいると、井坂がこちらに気づいた。そしてにやりと笑う。俺はたまらなくなつて駆け出した。だめだ。なんで逃げてる。助けないと。助けないといけないのに。

家につき、階段を上がり、ベッドにうずくまる。最低だ。俺は。翔也は、友達になつてくれた。いじめからも助けてもらった。それなのに、それなのに俺は、あいつに怒りにまかせて暴言を吐き、謝罪もせず、いじめられているところを見捨てた。いじめも、俺のせいみたいなものだ。きっと、あいつが俺を庇ったからだ。翔也は、さっきのような酷いいじめをいつも受けていたのだろうか。先生は気づかないのだろうか。まさか、こんな事

になるなんて……。恩を仇で返すにも程がある。最悪の人間だ。臆病で、自分勝手に、本当に俺はクズだ。情けない。ごめん、翔也。ごめん、母さん、父さん。こんな人間に育つて。もう償つても償いきれない。俺はこれからどうしたらいいんだ。

夏休みが明けたら、今度こそ、謝らなければ。それで罪は消えないけれど、せめて、心から謝らなければ。俺は心に誓った。

夏休みが明けた。全校集会だ。先生たちの話しを何となく聞いていた。

「……ように、すっかり気を引き締めて……」
長いなあ、とうんざりしてたら、突然ある名前が耳に飛び込んできた。

「一年三組の、松田翔也君は夏休み中に転校しました。突然のことでみんな驚いて……」

その後、先生が何と言っていたのかは分からない。ただ、翔也がもう自分の力の及ばない場所に行ってしまったという事実打ちのめされていた。

「松田君、いじめが親にばれたから転校したんだって」

そんな話を小耳に挟んだ。……じゃ、俺のせいじゃないか。俺のせいで翔也はいじめられたんだから。謝る機会も、俺は自分でなくしてしまつたんだ。

学校が終わり門を出ようとしたら、すぐそこに井坂がいた。俺は目を合わせないようにして歩いたが、あいつは俺に話しかけてきた。

「おい、杉本、この前見てたよなあ？ 橋で。ま、逃げたがな。お前は。それより、昔お前をいじめてただろう？ なんてやめたか知ってるか？ ……あいつが俺に言ってきたんだよ。自分がかわりになつてもいいからお前をいじめろのをやめろ。じゃないとチクるぞつてな。もちろん俺らはチクられてでもしたい事なんかじゃなかったからやめたぜ。ま、安心しろよ。お前は飽きたからもういいじめねーよ。ははは。あいつがいなくても頑張れよー」

嫌味つたらしく笑いながら井坂は走り去っていった。

そんな……。いじめがなくなつたのは翔也のおかげだったなんて。俺はあの時酷い事を言つたのに。俺は謝る勇氣すらなかつたのに。翔也が、俺のために、自分を犠牲にしていたなんて……。なんて勇氣があるんだろう。なんて優しいのだろう。俺とは正反對だ。こんな最低の人間のために、あいつを犠牲にしてしまつたのだ。翔也には、なんと感謝を述べても足りないし、なんと謝罪しても足りない。そしてその一部を伝えることから、できなくなつてしまつた。だがそれもこれも、全て俺のせいなのだ。まったく、俺は本当にどうしようもない奴だ……。後悔と罪悪感に苛まれ、押しつぶされそうになりながら、とぼとぼと家に帰るのだった――。

時が経ち、俺は中学を卒業し、高校を卒業した。そして俺に起こつたすべての出来事

は、遠い過去となり、忘れ去られていた。

ふう、と一息ついてベッドに座つた。就職するため一人暮らしの準備をしているところだ。俺の部屋も思つていたより色々、物があるな。いる物といらぬ物、持つていく物などを分けて段ボールに入れるのがこんなに大変だとは。よし、と気を入れ直して次は本の山に取りかかった。小説はあんまりないけど、漫画は結構集めたな。懐かしい。読みはじめたらきりがないので、ページを開くのをぐつとこらえる。自由帳も出てきた。昔の自分の意味不明な絵や、文章を見て一人でくすつと思わず笑う。それも最後のページまで見るのを今回はやめにして、次にとりかかる。すると、小学校と中学校の卒業アルバムを見つけた……。はっ、として俺は昔の記憶を呼び覚ました。松田、翔也。すっかり忘れていた。忘れてはいけなかつたのに。いや、俺は心の奥底で、忘れようとしていたのかもしれない。あの辛い記憶は、その後の平穩な生活

を重ねるうち、徐々に薄くなつていった。俺はどこかでそれを望んでいたのだ。時間が傷を癒やしてくれると信じて身を委ねたのだ。そう、あの時のように、自分のために。何も変わっていないじゃないか。俺は。過ちから何も学んでいないじゃないか。このままではいけない。変わらなければいけない。今からでも。俺は心を決めた。

プルルル、プルルルル、プルルル……
「もしもし、杉本泰久といます。お忙しい中すみません。あの、覚えていますか？ 中一の時にお世話になった……あ、はい！ そうです！ それで、あの、中一で転校した同級生で、三組だった……はい！ そうです。松田翔也君です。その、松田君の、連絡先を教えてください。……はい、はい、そうですね……はい、ありがとうございます。お手数おかけします。失礼します」

先生は連絡先を知らなかった。まあ、それは予想していた。だが幸い先生は親切にも、

当時の翔也の担任に連絡してくれるそうだし、そして分かり次第、俺に電話をかけてきてくれるらしい。俺はもう一度心の中で先生に感謝した。

俺が翔也の連絡先を知っていれば早かったのに。だが小学校時代は携帯は持っていなかったし、連絡はいつも固定電話だった。

そんな事を考えていてあつという間にすぎた数日後、電話がかかってきた。緊張しながら電話に出た――。

その番号は、今、俺の右手の中にある。変な気持だ。それをしばらく見つめて、スマホを取り出し番号を押した。

電話に出たのは、翔也のお母さんだった。今は、翔也は家にはいないらしい。また折り返し連絡してもらおう頼み、電話を切った。

翌日。俺はずっとそわそわして片付けもはかどらない。彼は、電話があつたと聞いただろうか。どんな気持になったのだろう。

次の日。電話がかかってきた。いよいよだ

——。電話に出た。

「もしもし」

「もしもし」

「あの……泰久です。杉本泰久です」

「なんで敬語なんだよ。泰久。久しぶりだな」

彼は、まるで何事もなかったかのような口調だった。そして昔のように、声には優しさがこもっていた。

「う、うん、翔也。久しぶり」

「で? どうしたんだ?」

「あ、あの、急なんだけど、また今度会って、話したいんだ」

「おう、いいよ」

「いつなら、会えるかな?」

「俺は、えーっと……五日後、以降なら空いているよ」

「……じゃ、五日後にしようかな。俺がそっちに行くけど、どこか良い場所ある?」

「えーっと、大きめの公園ならあるよ。店は

……あんまりないんだけど……」

「公園で大丈夫だよ。名前を覚えてくれたら調べて行くよ。時間は……二時くらいでいいかな?」

「ああ、大丈夫だよ。公園は、——公園ってところ」

「うん、調べとくわ。ありがとう。じゃ、また」

「うん、またな」

電車の窓から景色を見ている。空は晴れ、桜はまだ満開にはなりきれていない。すぐに視界から消えていく建物や、ゆっくりと動く山々をただぼんやりと眺めている。

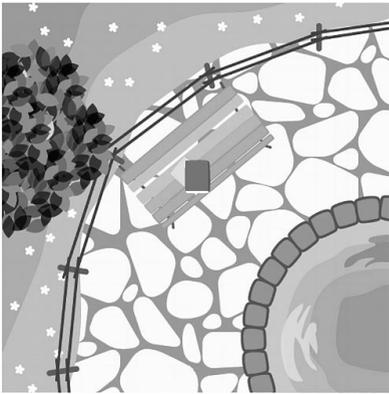
彼は今、どんな気持ちなのだろう。そう、考える。自分を裏切った人に対してどんな感情を抱いているのだろう。

俺は……、不安だ。今すぐ家に帰りたい。だが、そうすることはできない。いや、してはいけないのだ。同じ過ちは繰り返してはな

らない。俺はずっと、楽な方に逃げてばかりいた。俺はもう逃げない。今度こそ、彼に心から謝って、感謝を伝えるのだ。勇気を出すのだ。そう、今度こそ……。

電車が目的の駅についた。改札を出て、スマホでその公園を検索する。見なれない町にほんの少し緊張した。自分だけが仲間外れのような気がしたが、そんな思いはふりはらってスマホの道案内に従った。十分程歩くと、子供たちの元気な声が聞こえてきた。向こうにあるベンチには、彼が、座っていた。俺は、呼吸を落ち着かせながら、ゆっくりと近づいて行く。彼がこちらに気づき、立ち上がって優しい目で笑う。俺は彼に近づく。すっかり大人になっっているが、昔の面影も残っている。とうとうこの時が来たのだ。俺はようやく、俺の気持ちを伝えられるのだ。そして彼の気持ちを知れるのだ。

心の準備をととのえ、彼と目を合わせる。俺は、深く息をすった。



《優秀賞・一般の部》

随想部門

誰もが大切にし合える社会へ

陣内 しんのうち 和美

「手のシワのいっちゃん無か。きれかね」

おばあちゃんが、わたしの手を優しくなでた。それでわたしは、「生きよう」と思えた。

このところ、中学生や芸能人の自殺報道が続いている。日本における十〜三十代の死因順位の一位は自殺だそうだ。

「なぜ? どうして?」「思いとどまることはできなかったのか」「支えになりましたか……。助けたかった……」苦しく、辛く、どうしようもなく悲しい気もちになる。

その後、「真面目すぎたから」や「もともと心が弱かったから」など、その人、個人のせいかのような心ない言葉を聞いた。本当に、その人だけの問題なのだろうか。

自殺はテレビの中の遠い話ではない。実は身近な人の中に自殺で親を亡くしている人をわたしは知っているし、自分自身も十代〜二十代にかけて「死にたい気もち」に苦しんだ。何だかその時は、自分が大そう役立たずに感じていた。社会に必要な邪魔者だという感覚。家族とも上手いかず、居場所がなかった。

わたしは家を出たかったので、大学は家から離れたところを選んだ。でも、一人暮らしをする勇氣もお金もなかったので、祖父母の家に下宿させてもらうことにした。

祖父母は喜んでくれた。

「東大に行くより、えらかね」

なんていって、笑った。もちろん、冗談だが気もちには本気っぽかった。

祖母は毎朝、わたしの部屋へやってきて

「起きんしゃーい。気もちのよかよ」

と、勢いよく雨戸を開ける。そして、

「山の知れとんさ（山が見えている）」と、

山の見え方で、その日の天気を予報する。

それから、

「お布団は『運動』と思ってあげんしゃい」

と続く。確かに、運動と思えば、布団を上

げるのも、上げた後も、何だかすつきりして、

気もちがいい。

掃除をしても、「気もちのよかね」

お風呂に入っても、「気もちのよかね」

背筋を正したら「気もちのよかね」

おばあちゃんは、何でも「気もちのよかごと」

にしてしまう。そんな風に考えたことな

かったな。と、わたしは驚きながらも、人生

で大切なものを得ていった。

祖父は気難しくてちょっと怖い。でも、地

域やお寺の仕事に進んで貢献しているので尊

敬する。ボランティアだよ。何でそんなに一

生懸命できるのかな。

ある日、玄関の落ち葉掃きを手伝ったら、

「自分から進んでやって、えらか」

と褒められた。手が空いていただけだった

と思うが、他に褒められることがなかったの

でうれしかった。

はじめは、そうやって過ごしていたのだが、

いつのころか門限や生活態度のことで祖父と

のいさかが増えた。祖母は、イライラする

わたしを怖がっていた。

「孫に刺されそうで、怖か」

と言ったのは、冗談ではなさそうだった。

そう思わせてしまったことにショックを受け

た。でも、態度を改めることができなかった。

大学二年生の春、祖母が胃がんで入院した。

祖父と二人暮らしになった。最近、祖父は気

が立っていていますます怖い。朝早くから庭に

出て、夜遅くまで一人作業をしている。

休日くらい、ご飯を作ろうと思って祖父に

声をかけたら、自分のことだけ考えとけばい

いと、断られた。わたしは、ステレオの音をガンガンにならして部屋に籠った。

「音を、小さくしてくれ」

と、怒っているような、悲しんでいるような祖父の声を聞いたが、聞かないふりをした。しばらくして、母から一人暮らしをするように言われた。叔母から、相談があったらしい。わたしは承諾した。このまま家にいると迷惑なのは明らかだ。

一人暮らしを始めて、一か月もたたないうちにすっかりやせ細った祖母が退院した。そして、そのあとすぐに祖父が全身のがんで入院し、やはり一か月もたたないうちに亡くなった。

祖父の最期は病院で、祖母とわたしの二人で看取った。祖父が朝早く庭に出ていたのは、体の痛みで眠れなかったからだそうだ。そして、病気が辛い人は、周りの音が普段よりも大きく聴こえてうるさく感じるそうだ。わたしは何も知らなかった。

孫に心配かけまいとする祖父に、どうして優しくできなかったのだろう。甘えてばかりで、自分のことしか考えていない。おじいちゃん、ごめんなさい。

わたしは、誓った。人に優しくできる人になります。思いやりをもって。おばあちゃんを大切にします。

だから、許して下さい……。

その後はあまりよく覚えていないのだが、祖母は、叔母夫婦と祖母の家で同居することになった。わたしは大学生活を送りながら、たまに祖母の様子を見に会いに行った。

いつだったか、祖父が亡くなる前につけていた日記の事を、祖母が教えてくれた。わたしのことが、書いてあったらしい。わたしはドキッとした。

祖父は、わたしのことを「しっかり者」と書いてくれていた。大学でボランティアに参加したことも誇らしく思っていてくれたようだった。わたしを責めたり非難したりする言

葉は、一言もなかった。祖母はわたしの手をとりに、優しくなでる。心が満たされていくのを感じた。

祖母の思いや優しさを受け止めたとき、自分が大切にされていることや、愛されていることを実感することができた。そして、今度は本当に、「人を思いやれる人になろう」と思った。

それから、母には感謝を伝えることを、父には笑顔を向けることを、妹には可愛く思う気もちを表現することを意識して行動した。前とは違う関係になれたと思う。

あれから、十年以上たって、祖母は今年で九十歳になる。今でも遊びに行けば、

「手のシワのいっちょん無か。きれかね」

と、わたしの手を見て言う。祖母の言葉はまるで「生きてくれてありがとう。あなたは、素敵だよ」と言っているように聞こえる。自分で、指のシワが増えたとも思うのだが。

自分の手と祖母の手を並べて比べてみた。なるほど、祖母の手は細くてしわしわである。でも、とてもきれいだ。わたしも、しわしわの手になるまで長生きしようと思う。おばあちゃん、ありがとう。

今の人生の目標は、六十五歳の定年まで、しっかり働くこと。老後はクルーズ船で世界旅行をすること。人に、思いやりと愛情を持って接し、相手の心を満たすこと。

人は人に救われる。

傷つけられるのも、人かもしれない。でも、優しさや温もりや愛情を持って誰かに接すれば、それが伝わって、広がって、今まだ苦しんでいる人を助けられるだろう。

そして、その人が感じた優しさが、また次の人に伝われば良いと思う。

誰もが大切に合える社会を目指し、まずは自分から頑張りたい。

《優秀賞・学齡児童生徒の部》

随想部門

群れるとくはひと

松田 和佳

人は、群れる生物せいぶつです。人は、いろんなグループを作つて、その中で生きています。国、都道府県、市、町。学校の中にも、学年というグループがあり、さらに、クラスというグループがあります。クラスの中でさえ、人は群れます。グループを作ります。私も、好きな友達と群れています。休み時間も、移動教室の時も、ずっと一緒です。私がみんなと群れるのは、楽しいからです。あと、一人であるのが恥ずかしいからです。なんで恥ずかしいのか、自分でもよく分かりません。でもな

んとなく、「あいつ、一人だ」って思われたくありません。群れていると、安心します。私は一人じゃないんだって。小学校の時より、中学校になつてからの方が、みんな群れるようになりました。それはきつと、みんなの「普通」が変わつたからだと思います。小学校の時は、一人でいても、別に恥ずかしいとは思いませんでした。それは、みんながいろんな人とコミュニケーションを取り、一つのグループに固執していなかつたからです。でも大きくなつてきて、みんなの「普通」が変わりました。みんな、「一人」を意識し始めたんです。私も、みんなと同じように、仲の良い子と群れました。

グループには、目に見えない境界線があります。このグループに入りたいと思つていても、グループの中の誰かが、その境界線をこわしてくれないかぎり、入れません。入りたから、群れたいから、人は他人に合わせます。人は、「普通」になろうとします。「普通」

なんて、誰が決めたのかも分からないのに。AさんにBさんが合わせて、BさんにCさんが合わせて、CさんにDさんが合わせる。そうしてできた「普通」は、ただのAさんのコピーです。私は、それぞれの個性を殺してまで「普通」でなくともいいと思います。でも、私は、そう思っていない。「普通」であろうとします。今までそうだったように、きつとこれからも「普通」に合わせると思います。「普通」というぬるま湯につかっていたと思うからです。人とあまりにも違うと、グループに入れないかもしれない、それは怖い。私は、とても弱いです。いつも誰かに気を使って、誰からも嫌われたくないと思っています。強がってみせたり、自分を良くみせたりする私の心のお化粧は、全然似合っていないかもしれない。でも、みんなの「普通」になりたい。みんなが出来ることは、出来ないダメ。みんながやっていることはやらないダメ。みんなが知ってる事は知つとかないとダメ。そう

やって積み重なっていくたくさんのダメ。ゾウ専用の体重計の針がふりきれぬぐらい重いダメの数々。ペチャンコにおしつぶされちゃいます。

人は、パズルのピースだと思っています。一人違う絵が画かれていて、一人一人違う形をしている。そのピースも無理矢理別のピースに合わせようとすると、こわれてしまいます。人間は、割れ物です。段ボール一面に「割れ物注意」のステッカーをはつてもたりないくらい、せんさいです。だから、私達、人間は他人を尊重してあげないといけません。でも、自分がこわれない程度に。自分に優しく、他人に優しく。「自分に甘く」ではなく、自分に優しく「です。みんながこれを実行すれば、きつと笑顔が増えると思います。

人は群れる生物いきものです。群れる、弱い生物いきものです。一人では弱くても、群れると強くなれます。マンモスだつて狩られていましたから、とつても強くなれること、間違いなしです。

でも、群れている時は、他人にも優しくしな
いといけません。これは、群れる時のルール
だと私は思います。思いやりは、大切です。



《優秀賞・一般の部》

傘
詩
部
門

大恵やすよ

子どもを抱いて歩いてきた

ふと空を見上げると

私の心と同じ色をしていた

ポツン……

雨が降ってきた

私と子どもに打ちつける雨

どんどん激しさを増していく

まるで私たちの未来を物語っているような

痛くて、辛くて、冷たい雨

すると知らない人が傘を差し出してくれた

やさしくて、温かくて、

包み込むような傘だった

気がつくと周りにいる大勢の人が

傘を傾けてくれていた

しばらくすると雨はやんで

雲の切れ間からは太陽が見えた

私の心に一筋の光が差し込み

大きな虹がかかっていた

やんだ雨が再び降り出したり

突然の夕立にあうこともあるだろう

そんな時は雨宿りをしたり

雨を避けて通ればいい

でも忘れてはいけない

私は一人じゃないということ

私の周りにはたくさんの人がいて

心に傘をさしてくれる人が大勢いる

だから悩むことはない

この子と一緒に前を向いて

歩き続けるだけ

大きな傘、小さな傘

ポロポロの傘で役に立てないかもしれない

それでもいつかは

心の傘をそっと差し出せる人に

私もなりたいたい



《優秀賞・学齡児童生徒の部》

詩部門

ぼくは、ここにいますよ

北尾 天珠

同じことをやっている
それ、ぼくもやったよ
同じことをされている
それ、ぼくもされたよ
なんで、ぼくに気づかないの？
ほくだって、ほめてよ
ほくだって、悲しいよ
ほくだって、ほくだって、

だれもぼくのこと見えていないのかな
とうめい人間になっちゃたのかな

とうめい人間にも

心はあるんだ

なみだも出るんだ

ありがとう！

だいじょうぶ？

自分を見てくれているって

すごくうれしい

ぼくは、ちゃんと言うよ

やっぱり、

とうめい人間なんていないから

だから、今日も

ぼくは、ここにいますよ



《優秀賞・一般の部》

創作童話部門

花咲かばあちゃん

藤本
忍

「たっ君、ちよつと手伝つてー！」

玄関から、おばあちゃんの声でした。

又、注文していた肥料や苗が届いたんだな。

ちよつとめんどくさいな……と思いつながら
も、

「うん、分かったよ。今、行くから」

と、僕は返事をした。

「ごめんね。年を取ると、持つのが大変だね」

と、おばあちゃんは、申し訳なさそうに言っ

た。僕は、黙ったまま大量に積まれた肥料や

苗を何度も裏庭まで運んだ。

「本当に、たっ君がいてくれて助かったわ」

おばあちゃんは、ニコニコしている。

僕は、おばあちゃんに頼まれると、嫌とは
言えないんだ。

僕のお婆ちゃんの趣味は、花の手入れ。今
は、ガーデニングとか言うらしい。

一年中、家の周りや庭には、花が咲きあふ
れている。だから、近所の人達から

「花咲かばあちゃん」

って呼ばれていて、まんざらでもなさそう

だ。僕も小さい頃は、おばあちゃんと一緒に

花を植えていた。と、いうより僕の場合は、

土あそびを楽しんでいただけかもしれない。

「たっ君は小さい頃、ミミズが出てくると『イ
ヤッー！』て泣きついてきたのよ」

と、おばあちゃんは、いつも笑いながら言
う。僕は、もうそんな弱虫じゃないのに……。

でも、最近のおばあちゃんの後ろ姿を見て
いると、ずい分小さくなったなあ……って僕

は感じていた。

ある日、学校から帰ってくると、母さんが家の中をバタバタと走り回っていた。

「ただいま……。母さん、そんなに慌てて何かあったの？」

「あつ達也。ちようど良かったわ。おばあちゃんが転んで、足を骨折しちゃったのよ！」

「えっ！? 本当？」

「うん。それで今、入院の準備をしているの。荷物ができたら、すぐに病院に行くわね」

「うん、分かった。でも、今おばあちゃんには？」

「今は、手術中なの。もうしばらく、時間がかかるみたい」

母さんは、戸棚からレトルトカレーを取り出した。

「達くん、ごめん。夕飯は、父さんとこれを食べててね」

「う、うん。分かったよ……」

母さんは、荷物を抱えて病院に走って行った。

夕方、父さんが帰ってきて、僕は一緒に病院に向かった。

おばあちゃんは、ベッドで静かに眠っている。包帯で、ぐるぐる巻きをされている足が痛々しかった。

僕が、おばあちゃんの手に触れると、おばあちゃんは、ゆっくりと目を開けた。

「たっ君……」

「うん、そうだよ。おばあちゃん、大丈夫？ 痛い？」

「ああ、ありがとう……。心配かけてごめんね」

おばあちゃんの目が、赤くなっていた。

僕は、次の日から学校が終わると、友達のを誘いを断わって病院に行った。そして、おばあちゃんが寂しくならないよう、一杯話をした。

しばらく経ったある日、おばあちゃんが、

「早く家に帰って、花の手入れをしないと。もうすぐ花の植え替えなのに……」

と、暗い表情になった。

学校の授業で、花や野菜を育てたことがあつた僕は、

「じゃあ、僕が代わりにやっておこうか？」

と、言った。

「えっ？ たつ君が？」

おばあちゃんは、目を丸くして言った。

「うん。できるかどうか分からないけど

……」

「ありがとう。その気持ちだけで十分よ」

おばあちゃんは、僕の手を握って言った。

日曜日の朝、新聞を広げている父さんに、

「ねえ父さん。庭の手入れってしたことある？」

と、尋ねた。父さんは、驚いた顔で、

「ああ、あるさ。えっ？ 達也がするの？」

「うん。おばあちゃんが、心配しているんだ。植え替えの時期だつて」

「そっかあ。でも、達也一人で大丈夫か？」

「ううん、分かんない。でも、やってみるよ。

だつて、おばあちゃんが帰ってきた時に、花が何も咲いてなかったら可哀相だもん……」

「そうだよな」

「うん、だから花をいっぱい植えて、おばあちゃんをびっくりさせたいんだ」

「よし、分かった。じゃあ、父さんも一丁手伝うか！」

父さんは、腕まくりをして笑った。すると

「じゃあ、私もやりまーす！」

と、台所から母さんも手を上げたので、僕と父さんは顔を見合わせて、また笑った。

庭の手入れは、草引きからだ。引いても引いても減らない雑草に苦戦した。ミミズも出てきた。でも、僕はもうへっちゃらだ。

雑草を抜いた後は、土を耕し、肥料をまいた。大きな袋に入った肥料を土の中にまくのは、かなりの重労働だ。出てくる汗をふいても、ふいても流れ出て、何度も目の中に入りしみて痛かった。

「おばあちゃんは、いつもこんなに大変な事をしていたんだな……。よくやるよな……」

と、僕が言うと、父さんが汗を拭きながら「大変だけど、手塩にかけて育てると、花がそれに応えて、きれいに咲いてくれるからね」「そっかあ……」

僕は、タオルで汗を拭きながら、ポットに入った苗を見つめた。

ある日、病院から帰ってきた母さんが、父さんと僕に大事な話があると言った。

「おばあちゃんの足ね。完治するのは難しいって言われたの。これからは、車イス生活になるって……」

「えっ！？」

僕も父さんも、一瞬言葉を失った。

「そんなに悪いのか……」

「おばあちゃんは『もう花の手入れができない』って泣いていたわ」

「そんな……。可哀相だよ！ ねえ、父さん、車イスに乗っていても、できるよね？」

「そんなこと言っても……。無理だろう……。？」

父さんは、大きなため息を吐いて言った。

僕は、それからずっと、車イスに乗ったままでも花の手入れができる方法を考えた。

そして、ある日、僕はひらめいた！

「プランターだ！ プランターに花を植ええられるように、台を作ればいいんだ！」

僕は早速、病院に行き車イスの高さを計った。そして、お年玉が入った袋を握りしめて父さんとホームセンターに行き、数枚の板とくぎを買った。

「プランターの作業台だなんて、よく思っていたな」

父さんは、笑いながら言った。

僕は、家に着くと板を計り、慣れない手つきで、のこぎりを使って板を切った。父さんに手伝ってもらいながら、金づちで釘も打った。数時間かかって、何とか台ができた。最後にニスをぬり、乾けば完成だ。

「やっとできた！ でも、おばあちゃんは、
気に入ってくれるかな……?」

「もちろん！ 大喜びするさ！」

僕と父さんは、ハイタッチをして笑った。

そして、おばあちゃんの退院の日がやってきた。家の前で待っていると、一台のワゴン車が停まった。ドアが開き、おばあちゃんを乗せた車イスフォークリフトが、ゆっくりと降りてきた。

「おばあちゃん、おかえり！」

と、僕が近づくと

「たっ君、ただいま」

と、おばあちゃんが手を振って笑った。

そして、皆で車を見送った後、僕はおばあちゃんに言った。

「おばあちゃんに、見てほしいものがあるんだ」

「えっ？ 何かしら？」

「こっちだよ。よいしょつと」

僕は、車イスを押しして庭の方に向かった。
「まあ、なんてきれいなこと!!!」

庭には、家族全員で作った花壇に、色とりどりの花が咲いていた。

「この花は、おばあちゃんが帰ってくるのを待っていたんだよ」

「うん、うん。ありがとう……」

おばあちゃんの目が、赤くなってきた。

「あつ、それから、もうひとつ。ちょっと待っててね」

僕は、プランター台を持って来て、おばあちゃんの車イスの前に置いた。

「えっ？ これは？」

「プランター台だよ。車イスに乗ったままでも、プランターの花の世話ができるんだよ。よいしょつと」

僕は、台の上にプランターを乗せた。

「まあ、すごい！ 高さも丁度だわ……」

おばあちゃんは、目を輝かせて言った。

「でも、たっ君、この台はどうしたの？」

「うん……。僕が作ったんだ」

「えっ？ たっ君が!？」

「父さんにも、手伝ってもらったんだけどね。おばあちゃん、使ってくれる?」

「うん、うん。ありがとう……」

おばあちゃんの目が、みるみるうちに涙で一杯になってきた。

「おばあちゃんは『花咲かばあちゃん』だから、これからも沢山の花を咲かせてよ。僕も手伝うから……ね」

と、言うと、

「うん、ありがとう……。これからも、沢山の花を咲かせるわね……」

おばあちゃんは、にっこり笑うと、そっと涙を拭いた。



令和2年度 人権問題文芸作品

『のじぎく文芸賞』

発行 令和2年12月
編集 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

〒650-0003

神戸市中央区山本通4丁目22番15号
兵庫県立のじぎく会館内

TEL 078 (242) 5355

FAX 078 (242) 5360

発行者 兵庫県 公益財団法人兵庫県人権啓発協会

印刷 (株)興正社

